

アリストテレスに於ける眞理概念の發展

藤 井 義 夫

序論 アリストテレスに於ける眞理の領域

本論 アリストテレスに於ける眞理の本質

第一章 論理學的領域に於ける眞理

第二章 形而上學的領域に於ける眞理

第三章 眞理の二重性

結論 アリストテレスに於ける眞理概念の發展

ὁππόθεν ὁ ἔχει καὶ τὸ καλέσθαι τῆν φιλοσοφίαν ἐπιστήμην τῆν ἀληθείαν, θεωρητικὴν μὲν γὰρ τέλος ἀληθείᾳ πρακτικὴν δ' ἔργου 「哲學が眞理の學と呼ばれることも亦正しい。なせなら理論的なる學は眞理を、しかし實踐的なる學は行爲をその目的としてゐるから。」⁽¹⁾ 凡ゆる事物はその存在性にと同じくその眞理性に關與をもたねばならない。凡ゆる存在は自らの存在性によつて存在するとともに、それらが眞理性に於てあることによつて自己の姿を顯示する。かくて存在をその存在性に於て究明するところの學はさ

らにその顯示されたる姿を解明するところの眞理の學に極まるであらう。まことに眞理を探究するものこそ「智を愛するもの」の名に相應しい。^(二)しかし眞理とは何であるか。あたかも存在なる言葉がさうである様に、眞理なる言葉も亦その明證的な装ひの故に、その本質は却つて我々の日常性の中に埋没しつくしてゐる様に見える。そして凡ゆる眞理を知ることが、如何なる眞理をも有たぬことと等しく、我々に厳しく禁じられてゐるのである。それ故に「眞理の觀想はある意味では難く、他の意味では易しい」と言はれた。^(三)まことに眞理は我々に課せられたひとつの謎である。そも／＼眞理とは何であるか。かつて問はれ、今もなほ、そして久遠に問はるべきこの問ひを、かのギリシヤ哲學の完成者アリストテレスの思索の中に述べることがこの試作の課題である。

(一) Metaph. α 1, 993 b 19—21.

(二) Plato; Resp. 475 E, 480 A, 490 A.

(三) Metaph. α 1, 993 a 30—31.

序論 アリストテレスに於ける眞理の領域

——論理學と形而上學との交渉——

總じて我々が何を研究の端緒とすべきかは決して瑣末なることではない。哲學研究がつねにそしてなによりも原理の學と言はれ、その端緒はしかしたゞ偶然的なものとして、我々の恣意に委ねられるとき、ひとは——「端緒」なる言葉のギリシヤ的表現⁽¹⁾の語源的關聯に従つて——端緒が原理をも規定し、端緒が根源的には原理そのものですらあつた、といふ事實を見逃してゐるのである。我々がよき端緒をはじめるのでなければ、我々は決して事物の眞理を把握することができない。「なせならば」とアリストテレスも云つてゐる。端緒は全體の半以上であり、そして我々の索めてゐる多くのものもそれによつて全く明瞭となる様に思はれるからである。⁽²⁾「それ故にアリストテレスに於ける眞理の本質を探究するに當つても、我々はまづ我々の研究の端緒そのものを規定するところのかの古典的な問ひを問はねばならないであらう。 *Utrum veritas sit in re, vel tantum in intellectu.*」眞理の領域は存在であるか思惟であるか。」これに對して中世のアリストテレス主義の中に確說せられ、現代に於てすら多くの人々を執拗に支配し續けてゐるところの傳統的解釋はかうである。⁽³⁾かの哲學者は眞理と虚偽とは事物の中にはなく思惟の中にあると云つてゐる。⁽⁴⁾この理由からしてアリストテレスに於ける眞理の思想を索めようとする人々は、形而上

學の許を去つて論理學に赴くのである。そしてこのことは既に明證的なものとしてアリストテレス學の常識とさへ信じられてゐる。「眞理は直觀される限りの對象にはなく、思惟される限りの判断の中にある」と主張するところの近代の認識論的哲學の洗禮を享けた人々にとつてこの解釋は殆んど疑ひを容れ難く思はれるであらう。さらにはアリストテレスが「論理學の祖」と稱へられ、かの完璧に近い論理學的體系の創設者たるの自負を、彼自らも明らさまに誇示して悔ひなかつたことは、かゝる傳統的解釋に抜き難き根據を提供するであらうことを、我々は充分理解することができる。^(三)

ところで眞理がひたすらに思惟のバトスであり、従つてその妥當領域を形而上學にではなく論理學に見出さうとするとき、ひとはかの「オルガノン」なる標題の下に集成された一聯の論攷の中、孰れにその積極的なる解明を拾ひうるのであらうか。命題論 (Περὶ ἐπισημειώσεων) なる標題によつて呼ばれるところの小篇に於ては確かに命題の眞理が直接にそして明快に語られてゐる、それ故にこの小篇こそアリストテレスの眞理の本質を開示するものとして我々の探究の出發點とされねばならない、とひとは主張しようとするのであらうか。しかしそのことを我々の古典學的良心

は拒否する様に思はれる。なせならばこの書のアリストテレス的起原の眞實については、かの範疇論 (Κατηγοριαι) と同じく、いな、それにもまして多くの疑ひが提起されてゐるからである。即ちその著作がアリストテレスその人によつて著はされたか、他の人によつてあるか、或はそれが彼の弟子による彼自身の講義のノートであるか、の決定について、アンドロニコス以來多くの註釋家並びに哲學史家たちによつて、種々の酬ひなき努力がなされた後に、ひとはこの決定を放棄してしまつた様にさへ見える。^(四)最近「アリストテレスの三段論法」について周匝な研究を貽したハインリッヒ・マイヤーは、かの主著と略、時を同じくして「アリストテレスの命題論の眞實性」なる論文を發表し、^(五)この書がアリストテレスのものたるに疑ひのないこと、しかもかの哲學者が晩年に於て無題の儘に遺した未定稿をテオフラストスが整理したものであることを論定することに於て委曲を盡してゐる。我々も亦この書の内容が他の論理學的著作と極めて整合的であり、アリストテレス的であることを認容するに吝かなるものではない。にも拘らずマイヤーの敘述の周匝さを以てすら、既に多くの人々によつて指摘された眞作への疑ひを解くには充分でない、従つてこの書の眞實性の最後の信憑は未だ期待し難い様に、私には思はれる。もしさうであるならば、この

書をアリストテレスに於ける真理の本質の探究に對する根源的典據として用ひることはできない筈である。なせならばポーニッツがかつて「アリストテレスの範疇について」考察するに當つて、かの「範疇論」なる著作に對して注意した様に、我々は「アリストテレスのものたるに疑ひのない他の著作から手段を藉りてくるといふ道をとらねばならぬ」であらうからである。^(六)このとき我々は「オルガノン」に於ける他の孰れの著作を藉り得るであらうか。又「命題論」の眞贋の問題を關心の外に置くとき、我々はこの書を我々の探究の本質的典據となし得るであらうか。そも、彼の論理學は真理の本質を開示するのであらうか。

(一) Eth. Nic. A 7, 1008 b 7—8. Plato; Gorgias 503 D 參照

(二) Thomas Aquinas; Summa Theologiae Q. XCVI, art. 1. Sed contra est, quod Philosophus dicit (Met. lib. VII) quod verum et falsum non sunt in rebus, sed in intellectu. Quaestiones Disputatae de Verit. Q. I, art. 2. Contra, Philosophus dicit in VI Met. non est verum et falsum nisi in mente.

(三) Brandis; Handbuch der Geschichte der griech.-röm. Philosophie. 1853 II, 2, I, S. 476. Zeller; Die Philosophie der Griechen⁴. 1921 II, 2, S. 219 f. Grote; Aristot. 1872 II, p. 87. Brehtano; Von der mannigfachen Bedeutung des Seienden nach Aristoteles. 1862. S. 39. Trendelenburg; Elementa logices Aristotelae⁴. 1878 § 1. H. Mäler; Die Syllogistik des Aristoteles 1896 f. I. S. 10—14. Ross; Aristot. 1923. p. 164. 參照

(四) Günzposch; Über die Logik und logischen Schriften des Aristoteles. 1839. S. 89ff. Rose; De Aristotelis librorum ordine

et autoritate comment., 1854. p. 232 sqq. Irawt; Geschichte der Logik im Abendlande. I. S. 91 f. Ann. 147-164.

Barthelémy Saint-Hilaire; De la logique d'Aristote. 1838. I. p. 52. suiv. Zeller; op. cit. S. 69 f. Ann. I. 參照?

(五) Maier; Die Fehtheit der aristotelischen Hermeneutik. Arch. f. Gesch. d. Phil. Bd. XIII S. 23-72.

(六) Bonitz; Über die Kategorien des Aristoteles 1853. 拙譯、ホーニマン「アリストテレスの範疇について」(哲學論叢)七

頁參照。

總じてアリストテレス論理學の獨立的性格を一義的に規定することは、就中それがアリストテレス學に於て占むべき位置を決定することは著しく困難である。アリストテレスが論理學に對する彼の卓れた業績にも拘らず、彼の哲學體系の中に論理學を容るべき餘地を貽さなかつたことは、既に周知の様に、多くのアリストテレス學者を困惑せしむるに充分であつた。^(一)それ故に彼らはアリストテレスの論理學を、彼の哲學に於けるひとつの獨立した部門をなすものではなく、唯それへの「オルガノン」にしか過ぎないと解することによつて、換言すれば論理學は對象的にも方法的にも決して理論的學の對象から峻別された獨自のものを取扱ふのではなく、又かの學の中に獨立的なる地歩を主張するものでもなくて、他の學の認識に役立てらるべき道具にしか過ぎないと解することによつて、その困難を克服しようとして企てた。そして彼の著作のある場所に於て論理學及び修辭學が實的内容をもつ學ではなく、單な

る「言表の學」(ἐπισημῆσι λόγων)であると言はれたことの中に、この解釋のよき證人を見出さうとした。かくて論理學が他の學から區別されてもつところの特殊なる性格は、その對象の規定性によつて條件づけられたところの内容から乖離されて、たゞ思惟と概念との準すべき規則を明かにすることに、概念による形式的思惟法則を究明することにあると考へられた。かゝる規定からしてアリストテレスは傳統的形式論理學の祖となつたのである。(三)

しかし十九世紀の初葉以降に輩出したヘーゲルの流れを汲むすぐれた哲學史家達は、アリストテレス論理學がもつところの形而上學への本質的關聯を證示することによつて、かの論理學の傳統的形式論理的解釋を完膚なく破碎した。そして現代に於けるアリストテレス研究の進歩は既にかゝる形式論理的解釋を排撃すべき勞を省くのである。(四) アリストテレスは決して思惟形式を抽象的にそれ自らに於て把握しようとする意圖をもつてゐなかつた。かゝる存在と思惟との分袂は中世思想に於ける「概念の圖式主義」に胚胎したものであつても、決してアリストテレスのものではない。ロゴスは言葉の根源的意味に従つてつねにそしてなによりも存在のロゴスであることが最もギリシヤ的な思想である。論理はそれ自身への關係ととも

に客觀的實在への關係を保有し、論理的法則は究極に於て存在、それ自身、法則であつた。たとへばトレンデレンブルクが彼の「論理研究」に於て明晰に指摘した様に、^(五)概念はアリストテレスにとつて形式論理學に於ける特定の標識をもつた名辭として與へられるものではなくて、その中に事物の原因を含み、存在の秩序の中に顯示されるところのロゴスそのものに外ならなかつた。又ひとはアリストテレス論理學に於ける形而上學的證跡を、かの論理の最高原理と謂はれるところの矛盾律に最も明かに見ることが出来る。それは、如何なるものにもそれと矛盾する述語は歸屬しないといふ單なる形式論理的法則ではなくて、アリストテレスにあつては、彼の形而上學の中に形而上學的諸問題に關聯して述べられた様に、同じものが同じものに同じ點に於て同時に、屬し又屬しないことは不可能であるといふことの謂であつた、それによつて彼は認識と自體的なる存在との一致を示し、凡ゆる眞理の徵表と證示とを含むものとして示してゐるのである。^(六)さらに肯定と否定との本質は單なる論理形式を超えて、後にも示されるであらう様に、前者は存在の結合に後者は存在の分離に對應し、従つてそれらの根據は却つて事物そのものの本質の中に求められねばならない。判斷の様相についても同様である。最後に三段論法の本質は命題の單なる

時に非Aならず」なる命題の中に含まれた同時なる時間的規定を單なる論理法則としての矛盾律から排除しようとしたとき、それがこの命題に於ける形而上學的證跡の剪除を意味する限りに於て、それは全く正しいと云はねばならない。

Kant: Kritik der reinen Vernunft (Recl. Ausg.) S. 249f. Brentano: Aristoteles und seine Weltanschauung. 1911. S. 40 參照。

アリストテレス論理學に於て、判斷及び推理の論理形式の根柢をなすところの一般者と形而上學的的存在概念とが緊密な關聯を保つてゐること、又論理學的一般者の中には、存在論的本質概念に特有な形而上學的創造性が含まれてゐることを、我々は否定することができない。従つて彼の論理學を形而上學との基礎的交渉から抽象し、それを形式的に理解することからしては、その本質を決して把握することができないのである。しかしそのことからしてアリストテレスが意識的に、且つ全體的に彼の論理學說を形而上學的基礎の上に樹立しようとした、と論定することは明かにゆき過ぎてゐる。彼にとつて論理學は決して彼の全哲學體系に對して後の世に於ける汎論理主義的觀念論に於ての様に、*philosophia fundamentalis* の地位を僭稱しはしなかつた。なせならば我々は彼の論理學の中に相反する二つの思想系統を看取することに於て多くの俊敏さを必要としないからである。たとへばアリストテレスの論理學的研究の中心をなすところの二つの分析論 (*Ἀναλυτικὴ πρότερον, Ἄνω. ὄτερον*)

に於て「前書」と「後書」との間には原理的な區別が存在する、即ち「前書」に於ける概念、判斷、推理の論理形式は所謂形式論理的に、そして形而上學へ直接の交渉なくして論せられてゐるに反し、「後書」に於て研究の對象となつてゐる處の論證法は「前書」に於ける三段論法に形而上學的一般者を導入しそして形而上學への道を拓いてゐる。「分析論」を除く他の著作は概ね形式論理的色彩を帯びてゐるけれども（命題論、トピカ）我々はそれらの中に又屢、形而上學的思索の迹を辿ることもできるのである。（範疇論）我々は茲にこれらの書が相互に如何なる關聯をもつてゐるか、又一般に「オルガノン」に於けるこの形式論理的なるものと形而上學的なるものとを如何に關係づぐべきか、についての困難なる問題に深く立ち入つて論すべき違をもつてゐない。⁽¹⁾ たい我々が尠くとも認定してよいであらうことはかうである。アリストテレス論理學が單に方法的な意味をもつのみでなくて、その中に形而上學的根基を豫示してゐることには疑がない。しかしアリストテレスが彼の哲學的思索を「古き存在學」——*antiqua ontologia*——に於ける *εἶς* と *ἄλλος* とを乖離せしめることからして、そして論理學を學的に體系づけることからして、甫めたと言はれ得る限りに於て、彼の初期的思想に於ては存在のロゴスがではなく存在のロゴスがそのものとして自己目的々に問題の象面に

浮び、そしてかくロゴスが存在的なるもの、形而上學的なるものへの自覺なしに語られる限りに於て、彼の論理學はなほ「オルガノン」としての形式的なる意味を保持してゐるのである。この意味に於てアリストテレス論理學が我々の思惟形式をその研究對象とするところの「形式論理學」と呼ばれることも決して誤ではない。にも拘らずロゴスがつねにそしてなによりも存在のロゴスである限り、論理學は形式的なるもの、限界を超えて、存在的なるもの、形而上學的なるものとの緊密なる關聯を顯はにし、その原理は却つて形而上學の中に訊ねられねばならない、そしてこの意味に於てそれはまさに「形而上學的論理學」と呼ばるべきであらう。^(二)かくてアリストテレス論理學は自己を通路として、自己の本質と、その原理とを却つて形而上學の中に覓めねばならない、といふことが我々の想定しようとするテーゼである。

(一) これらの問題については、アリストテレス論理學に關する文獻に於て多かれ尠かれ關説されてゐるけれども、茲ではなによりもメイヤーの周匝なる研究が推されねばならない。尙 Solmsen: Die Entwicklung der aristotelischen Logik und Rhetorik. 1929 參照。

(二) アリストテレス論理學が形式的であるか否かについて、プラントルは次の様な言葉を洩してゐる。 Prantl: op. cit. S. 136. sic (die aristotelische Logik) ist formal gerade insoweit, als das menschliche Denken eine Form ist, und sie ist nicht formal gerade insoweit, als das Denken das Gedachte ist. イェーガーは我々が既に引用した章句(本文四五頁

註二)に對應して、他の場所でアリストテレス論理學が決して「形而上學的論理學」と呼ばるべきでないことを注意して
 220. Jaeger: op. cit. S. 305f.

アリストテレス論理學に對する以上の我々の解釋は、眞理の本質の探究に於ける端緒としての眞理の領域そのものの決定について、確實なる道を照明するであらう。なせならばそれによつて我々は次の様に論定すべき根據を得ることとなるであらうからである。論理學に於て眞理が語られるとき、それは眞理の本質への通路を拓き、その限りに於てそれは眞理の本質把握に對する重要な契機を含んでゐる、けれどもそこでは眞理の原理的なるもの、本質的なるものが明らさまに語られてゐない、そしてその究竟なる姿は却つて形而上學の中に於てはじめて明かに示されるのである。たとへば命題、判斷、推理の眞理は論理學に於て語らるべきであり、それらは論理學の擔ふべき課題であるけれども、それらの眞理がそこに歸趨すべき論理的法則の原理そのものの眞理は形而上學の中にその領域を索めねばならない。従つて「全體としての論理學が人智の樓屋に於ける礎石であるのではなくて、その建築へのオルガノン、道具をなしてゐるに過ぎない様に、論理的眞理も亦眞理の本質の一般的認識の道具にしか過ぎない」と云はれたこと(一)も、たゞ上の解釋に於てのみ、又その限りに

於て妥當性をもつのである。真理が論理學の最も基礎的な概念であると言はれるとき、それは論理學的なるものの根柢に於て顯はにされるところの存在なるもの *ἐπιβουλή* として、まさに論理學と形而上學との吻合點となることを意味してゐる。まことに「真理は存在と同じ地盤に立つてゐる」⁽¹¹⁾ (*To γὰρ ἰσχυρὸς ἐστὶν ὁμοίως τῆς αἰτίας*) として真理がもつところのこの *fundamentum in re* を我ものとするとなしには、即ち真理がこの基礎的存在と如何なる構造關聯をもつかを究明することなしには、我々は論理學的領域に於ける真理の正しき認識をすらもつことができない、そしてかゝる究極的なる真理の歸宿を、アリストテレスは形而上學の中に見出してゐるのである。この様に真理の本質を開示するものとして論理學をではなく形而上學を提示することは、真理の領域をひたすらに論理學に限局し、そして真理を形而上學から追放せねばならぬと確信する人々を殆んど驚倒せしむるに違ひない。しかし我々は却つてその驚きをこそ驚くのである。かつて多くの人々が論理學に於ける真理を唯一のものとして信じたことは、アリストテレスに於ける真理の本質の理解に對して決定的な躓きの石となつた。我々はなによりも形而上學的領域に於ける真理が如何にあるかを、そしてこれが論理學的領域に於けるそれと如何なる關聯をもつかを明

かにしなければならぬ。この課題は我々が形而上學に於ける眞理概念の發展の迹をたどることによつてのみ完全に果し得るであらう。又かくしてのみかの「多義にして矛盾に充ちた」アリストテレスの眞理の敎説の整合的なる理解と新しき意味とが我々に齎され得るであらう。しかし、我々が上に述べた様に、論理學に於ける眞理の敎述も、それが眞理の本質把握への通路を拓く限りに於て、無視され輕視されることは許されないのである。

(一) Herbertz; Das Wahrheitsproblem in der griechischen Philosophie. 1913. S. 187 f.

(二) Anst. pr. A 46, 52 a 32.

本論 アリストテレスに於ける眞理の本質

—その發展史的究明—

眞理の本質は何であるか。この問ひに對して殆んど不可抗的な力を以て我々に迫るところの傳統的な命題はかの *veritas est adaequatio rei et intellectus* であらう。イザークによつて創説せられ、聖トーマスに及んで彼の認識論の基調とせられたところのこの傳統的命題は、それ以後我々の思想の世界を嚴しく支配し、カントのコペルニクス的轉回を以てすらそれを克服し得なかつたと云はれる。^(一)そして現代の哲學に

於てもこの命題の整合化への努力と、その力強き表現と、そしてその撓まざる支持者
 とを見出すことは決して困難ではない。^(二) しかし我々は茲に傳統的眞理概念の歴史
 とその現況とを縷説する必要はないであらう。我々にとつて重要なことは、眞理に
 ついてのこの世界支配的思想がその典型的代辯者をアリストテレスに見出すとい
 ふ一般に承認せられた事實である。たとへばブレンターノはアリストテレスが本
 來眞理の下に理解してゐたものは「事物と認識との一致であり」、「認識する精神と認
 識された事物との合致である」と述べ、^(三) マイヤーはそれを「現實的なものへの關係を
 含んだ思惟即ち實在の模寫にむけられた思惟作用と存在するものとの一致なる言
 葉を以て言ひ表はしてゐる。^(四) そして「命題論に於て與へられた言表は事物と同じ仕
 方で眞である」(*Opinions of Aristotle in his own words*)^(五) といふ言葉は、上の解釋を裏づ
 けてゐる様にさへ見えるであらう。まことに、アリストテレスの眞理の探究を「實的
 學としての哲學の課題ではなくむしろ形式的論理學のそれである」と解する人たち
 が、彼の眞理の中に傳統的眞理命題を想望し、そしてこゝにも我々に贈られた傳統的
 なる學的遺産の創始者がアリストテレスである、と信じようとすることは極めて通
 俗的な理であるに違ひない。のみならず我々はかゝる眞理の形態が、後に見るであ

らうやうに、アリストテレスの眞理思想の重要な契機として存在してゐたことを充分承認しなくてはならない。

しかし彼の他の哲學的基礎概念についてもさうである様に、彼は眞理概念を一義的な規定がそこから把握され得る様な明白さを以ては、決して語らなかつた。彼の所謂「眞としての存在」(τὸ ὄν ὡς ἄληθές)には多くの疑義が存してゐる。アリストテレス的に言ふならば、τὸ ὄν ὡς ἀληθές λέγεται τὸ ἀληθέςである。まことに多くの哲學的研究を概念の多義性(πολλὰ καὶ ἕνα νοούμενον)の吟味から甫めることをつねとしたところのかのスタゲイラの哲學者にあつて、眞理も亦種々の意味に語られたと考ふること程アリストテレス的なものはないであらう。ブレンターノは形而上學卷△第二十九章に於て偽についてなされた分類を手懸りとして、眞理が大凡次の四つの意味に區別し得られるものとしてゐる。一、判断に於てのみ見出されるところの第一の固有なる意味に於ける眞偽、二、單純なる悟性知覺、定義及び感覺に於ける眞偽、三、事物に於ける眞偽、四、虚言者と謂はれる如く人間に眞偽の規定が附與される場合。^(六)マイヤーも亦アリストテレスの眞理概念の多義性に關して、結合し分離する思惟作用としての眞理を固有なる眞理概念として措定した後、この概念の「本質的變容」として、凡ゆ

る欺瞞から自由な感性的知覺、純粹概念的思惟、睿智的事物並びに純粹形相のメーシスの把住、及び單一にして結合されざるものの認識などについて語り、この様な真理の領域の擴張が判斷に於てのみある真理に對して生すべき矛盾を鋭く指摘してゐる。^(七)これら慧敏なる哲學者たちのこのよき狙ひにも拘らず、アリストテレスの真理の本質について彼等の射當てたものは、我々の期待を美事に裏切つて、我々がさきに注意しておいた様に、かの灰色の傳統的真理概念に外ならなかつた。即ち彼らはアリストテレスに於ける真理の固有なる適用領域を判斷におき、他の真理概念は「根源的真理概念の轉用に基づく固有ならざるもの」として固有なる真理から區別されるべきことを、そして真理に關するアリストテレスの主なる論述はもつぱら判斷的真理に限られてゐることを述べてゐる。しかし何故にかの判斷の領域に於ける真理が固有なるものとして措定されるのであるか、又種々なる真理概念は相互に如何なる關聯をもつてゐるか、については少しも論明を興へはしなかつた。

ところで彼らのこの思索の不透徹さのよつて來るところは何であるか。それは彼らが真理の領域をひたすらに論理學に索めて、形而上學の中に見出し得なかつたこと、又たとへ形而上學に於ける真理の敘述に關説せられた場合に於ても、アリスト

テレスの形而上學がもつところの思想の發展的契機を見逃し、彼の眞理の本質をその初期的な形態に索めたことに歸因せしめらるべきであると思はれる。我々は他の機會に於て、^(八)アリストテレスの形而上學が體系的に構成された統一的著作ではなくて、その中に成立の時期を異にする種々の思想系統を看取し得ることを詳細に規定した。従つて我々が形而上學の中に眞理の本質を索むべきであるとするとき、その發展史的契機が顧慮されることなしには、我々は決してアリストテレスの思想の正鵠なる理解を期待することはできないのである。それはあたかもプラトンに於て、彼の對話篇の年代決定の問題が閑却されたとき、彼の哲學の無稽なる叙述が眞面目に問題とせられ、^(九)プラトン哲學の眞なる把握が決して可能でなかつたことと羈を一にしてゐる。そして我々がアリストテレス形而上學の中に眞理概念の發展を述べるとき、我々は甫めて彼の眞理の本質の統一ある思想に出會ふことができるであらう。

(一) Brentano; Wahrheit und Evidenz, 1930. S. 9 ff. Heidegger; Sein und Zeit, 1927. S. 215 參照

(二) Geyser; Über Wahrheit und Evidenz, 1918. S. 12, 16. Brentano; Psychologie vom empirischen Standpunkt. II, S. 160 f.

Husserl; Logische Untersuchungen², II, 2. S. 118, 122 f. Meinong; Über Möglichkeit und Wahrscheinlichkeit, 1915. S.

32, 39 f.

アリストテレスに於ける眞理概念の發展

- (三) Brentano; *mannigf.* *Bedcut.* S. 26, 33.
- (四) Maier; *op. cit.* S. 17 f. *Ueberweg*; *op. cit.* S. 28 參照。
- (五) *Do Interpr.* 9, 19 a 33.
- (六) Brentano; *mannigf.* *Bedcut.* S. 31—33.
- (七) Maier; *op. cit.* S. 6—10.
- (八) 拙稿「アリストテレス形而上學の主題とその構成」(本誌第二百三十一—二百七號)參照。
- (九) たとへば *Lutoslawski*; *The Origin and Growth of Plato's Logic*, 1905 p. 27 參照。

第一章 論理學的領域に於ける眞理

我々はアリストテレスの形而上學に於て眞理が問題とされたのは如何なる意味に於てあるか、又それは形而上學的思想の發展に従つて如何なる轉化を遂げたか、を究明するために、その成立期を異にし、しかも同じ關聯に於て眞理が取扱はれた最も特色ある場所を比較し檢覈してみよう。我々はかつて形而上學の中に初期的時代(卷 A, K, Δ)過渡的時代(卷 B | E)及び體系的時代(卷 Z | Θ, M)の三期を區別した。そしてそれらの時代に於て、存在の種々なる意味が枚擧され、眞としての存在(ἡ ἀληθὴς ὄντως)なる名の下に眞理の意味が解明されてゐるのは、卷 Δ 第七章、卷 E 第四章及び卷 Θ 第十章である。

アリストテレスの長き形而上學的思索を通じて、かの周く知られた存在の四つの區別が最も早き時期に現はれたのは恐らく卷△第七章のそれであらう。卷△に於ける思想は既にポーニツツによつて克明に論證された様(一)に他の諸卷との引證關係からして、むしろ形而上學及び自然學の成立前期に生じたものと言はねばならぬ(二)。そしてこゝに與へられた哲學的乃至自然學的語彙の解釋は、アリストテレス自身の思想であるよりもむしろ彼のアカデメイア時代に流布した一般の見解の集成と見らるべきであらう。卷△第七章に於ては存在の意味がまづ「偶有的存在」(τὸ καθ' ἑαυτὸν οὐκ ἔχον) と「自體的存在」(τὸ καθ' ἑαυτὸν) 即ち範疇の形態を示すところの存在とに區別された後、眞の意味に於ける存在、僞の意味に於ける非存在について次の様に述べられてゐる。

「更にあること (τὸ εἶναι) 及びある (τὸ ἔσθαι) はなにかゝ眞であることを、あらぬこと (τὸ μὴ εἶναι) はなにかゝ眞でなくて僞であることを表はしてゐる、あたかも肯定と否定との場合と同じ様に。たとへばソクラテスは教養ありといふことは、これが眞であることを、或はソクラテスは色非白なりといふことは眞であることを、然るに對角

線は可測的ならず^(三) (ἡ ἀξιωματικότης) といふことは偽であることを表はしてゐる。^(四)
 こゝで眞を表はすと言はれた存在は、そこに用ひられた言葉 — εἶδος, ἔσθλα — そのものから明かである様に、主語と述語とを結合する判断の繫辭を意味してゐる。ところで繫辭は論理的にはその基體となるべきものなしに、そのものとして事物を標示することはない。即ちそれはなにか存在するものであるのではなくて、連繫さるべきものなくしては思惟し得ないところの結合或は分離を表はしてゐるのである。^(五)
 そしてこの思惟されたるものの連繫 (συντακτικὴ τῶν νοημάτων) を意味の統一的全體としての結合を眞理はなによりも自らの本質としてゐる。従つて「如何なる連繫によつても語られないところのもの」 (τὸ κατὰ μὴσέλιαν συντακτικὴν ἀξιωματικὴν) には眞偽の區別は存在しないのである。^(六) かくて眞偽の支擔者である處の繫辭は判断の中核であり、この ἡπόθεσις によつて判断は判断として成立する。單なる言葉或は言表の集合は判断であることができな、判断はそれが言表であることによつてはなく、それが眞であり又偽であることによつて判断となるからである。^(七) ところで判断の眞理は繫辭があることを言表するとき、虚偽は繫辭があらぬことを言表するとき成立する。換言すれば或る主語についてその中に含まれた存在の様態をもつところの述語を

繫辭によつて結合するとき眞なる判断が成立し、それが分離されるとき偽なる判断となる。なせならばアリストテレスにあつて、あることは連繫されそして一であることを、あらぬことは結合されずして多であることを意味してゐるからである。(八)この意味に於て眞理は、その規定の積極的たると消極的たるとを問はずつねに肯定の側に、偽はつねに否定の側にあるのである。かつてアペルトがアリストテレスに於ける存在の意味を判断の繫辭に限定し、彼の「範疇の論理的解釋」の主要なる典據をこの場所にもとめ、そして茲に所謂眞としての存在を「もと／＼範疇に何ら係りのないところの主語と述語との結合の客觀的妥當性或は非妥當性を表はすものと述べた(九)ときその解釋はこの場所に關する限りに於て決して不當ではないのである。

しかし我々はあることが眞であり、あらぬことが偽である、といふことの意味を尙詳細に考察しなければならぬ。アリストテレスは同じ卷の、偽の種々なる意味について論じた一つの場所に於て「事象としての偽」(ὡς πραγματικῶν ψευδῶν)「偽なる言表」(ὡς λόγων ψευδῶν)及び「偽なる人」(ἀνθρώπων ψευδῶν)を區別し、偽なる言表について次の様に述べてゐる。(10)「偽なる言表は、それが偽なる限りに於て、(1) ψευδῶν(2)存在せざるものの言表である。それ故に偽なる言表はそれについて眞なるもの以外のものについてある、た

とへば圓の言表は三角形のそれについて偽である^(一)。この様に偽なる言表が存在せざるものの言表であるのは、それが偽なる限りに於てゝある。一見 *petitio principii* に似たこの *hypothys* なる限定句は、しかし如何なる意味を擔ふべきであるか。上の例示を援用するならば、中心點より等距離にある點の軌跡なる言表が三角形について語られるとき、このものは存在せざるものであり、その限りに於て偽なる言表である。しかしかの言表は凡てのものについて偽であるのではなく、或る存在するもの、即ち圓については真であり、たゞそれが三角形に關する限りに於て偽でなければならぬ。一般的に言ふならば、或るもの(A)がそれを内容としなところのもの、従つて事態的に存在しないものについて語られるとき偽であり、或るもの(非A)が存在するものについてゝはなく、存在せざるものについて語られるとき真でなければならぬ。その逆も亦真である。従つて非存在の言表が偽であるのは、それが偽の根源的形式(Aは非Aなり)をもつ限りに於てゝなければならぬ^(二)。以上のことから明かである様に、言表の眞偽はそれについて述べられるところの事物の事態的なる存在、非存在によつてゝあることの根柢にこの基礎形式をもち、より根源的には思惟の基礎原理と言はれるところのこの形式に従ひ或は従はざることによつて眞理が成立するものと言

はねばならない。真理のこの形態は、又一般的用語法に従つて、形式的真理と呼ばれてもよいであらう。或る言表はそれが矛盾律、同一律及び排中律に、或はその上に組成された三段論法的構成——*συλλογισμὸς ἐπιδηκτικὸς, διαλεκτικὸς, ἡντοπικὸς*——に従ふ限りに於て眞であり、然らざるとき偽である。そしてこの様に繫辭のある、あらゆるが主語と述語との結合の論理的妥當性、非妥當性を表明すると解せられるとき、肯定がつねに眞であり、否定がつねに偽であることの正當なる意味をも我々は汲みとることができらうであらう。

眞としての存在がこの意味に於て語られるとき、それは論理學の課題であつて、形而上學的領域からは追放されねばならない。なせならばアリストテレスが明示した様に、眞としての存在は思惟の結合に存し、又思惟に於けるバトスである、しかも(形而上學的原理は)この種の存在について、^(二三)はなく、外的なそして分離した存在について索められてゐるのだからである。そして原始形而上學に於けるメトドスからして、我々が上に確説し得た真理の形態が、アリストテレスの形而上學的思惟の發展に於ける最も初期的なる真理概念である、と我々は敢て主張してもよいであらう。

(一) Bonitz: *Aristotelis Metaphysica*, Comment. 1848, p. 12—20.

- (二) 尠くとも卷Δ第七章に於ける叙述が他の二つの場所よりも以前に成立したのであらうことは、それらと相關聯した二つの場所に於て、卷Δのこの章が引用されてゐることにまつても明かであらう。Metaph. E 4, 1028 a 4—6, Z. 1, 1028 a 10. 尤も前者については疑がある。Bonitz; Comm. p. 294. 参照。
- (三) シュテューグラーはヘッカーの原典 *τῆ ἐκείνου ἀντικειμένου* を *ἀντικειμένου ἀντικειμένου* と校訂し、前者の讀方に従つても對角線は不可測でない、即ち可測的である、となつて偽なる言表を含むことにはなるけれども、この場所ではむしろ *τῆ ἐξ* 或ひは *ἐξ ἐστὶ* が偽としての言表を、*ἐστὶ* が眞としての言表を示してゐる、と述べてゐる。ラッソンのこの言葉は次の様に譯述したのも上の意味から正當であると言はねばならぬ。Lasson; Aristoteles *Metaphysik* 1924. S. 297. Dagegen der Satz: die Diagonale ist nicht kommensurabel, bedeutet: dies, nämlich dass sie kommensurabel sei, ist falsch.
- (四) Metaph. Δ 7, 1017 a 31—35.
- (五) De interpr. 3, 16 b 22—25.
- (六) Thet. I, 16 a 7—8. Cat. 4, 2 a 7—10. De an. 8 I^o 8, 432 a 11—12, 6, 430 a 26—28.
- (七) De interpr. 4, 17 a 1—5 *τὰ ἐν τῷ ἐξ* は言表であつても眞偽の區別をもつてゐぬから。
- (八) Metaph. θ 10, 1051 b 12. Bonitz; Int. Arist. 221 a 8—18 参照。
- (九) Apelt; Beiträge zur Geschichte der griechischen Philosophie 1891. S. 113f. 彼によれば自體的存在は「範疇」を、偶有的存在は「その本質を示さない」ところの主語と述語との結合を「可能的、現實的存在は「範疇の様相的關係」を表はす」とする。
- (一〇) Metaph. Δ 29, *νοῦ* に用ひられた *λόγος* なる言葉の意味は明瞭でなく、それによつては *Mater*; op. cit. S. 12 Anm. 2. Bonitz; Comm. p. 276, sqq. Ross; Metaph. Comm. I. p. 345—6 参照。
- (一一) Metaph. Δ 29, 1024 b 26—28.

(11) Maier: op. cit. S. 12 参照。

(12) Metaph. K 8, 1065 a 21—24.

しかし我々は更に歩を進めねばならぬ。言表はつねにそしてなによりも或るものについての或るものの言表である。(ἐστὶ δὲ ἡ λέξις πῶτος τὴ κατὰ τὸν οὐς)そしてそれは凡ての場合に於て真か偽かである。⁽¹⁾ 繫辭のあるあらぬは主語と述語との結合の論理的妥當性をのみならず、同時に對象の存在性をも共に表示(ἡ ποσότης)しなければならぬ。言表はそれが一般に論理の原理に従ひ、内在的に矛盾を含まぬことによつて真であるのではない、それは真理の *conditio sine qua non* であり、消極的條件ではあつても真理の試石となるには充分でないからである。言表はその中に如實なる對象の事態的存在を證示することによつてはじめて真なりと言はれる。AがBであることの真理は、両者が形式論理的に矛盾しないことではなく、却つてAがBとして存在することによつてはなければならぬ。それ故にアリストテレスは「言表が真であり偽であると言はれるのは事物が存在し或は存在しないことによつてはあつて、自らが反對のものを許すことによつてははない」と述べてゐる。⁽¹¹⁾ たとへば茲に人ありとしよう、このとき「人あり」といふ言表は真である。そして逆に「人あり」といふ言表

が眞なる限り、こゝに人がゐる筈である。しかし眞なる言表は決して事物の存在の原因ではない。却つて事物こそ言表の眞なることの原因であるであらう。なせならば言表の眞偽は事物の存在と非存在によつて言はれるからである。^(三)このことは多くの人々によつてアリストテレスの眞理概念の本質的規定として代表せしめられたところの卷 E 第四章に於て最も直截的に示されてゐる。

「眞としての存在及び偽としての非存在は結合と分離とに依存し、相共に矛盾項の配置に關してゐる、なせならば眞理は結合されたものについて肯定することであり、虚偽とはこの配置の反對だからである。」^(四)

茲に結合され分離されたものについて述べられてゐるところの眞と偽との意味に於ける存在、非存在は、主語を述語に結合するところの繫辭をではなくて、一つの判断についてそれを主語にもつところの述語的規定としての存在を意味してゐる。即ち判断の眞理が繫辭の論理的妥當性にはなく、事物と判断との一致に用ひられてゐるのである。プレントナーはさきに掲げた卷 Δ 第七章に於ける「眞としての存在」とこの場所に於けるそれとの意味の差を明確に指摘してゐる。^(五)すなはちかしこでは「眞としての存在」が主語と述語とを結合するところの判断の繫辭として、そこに

眞として主張された命題自體の成素をなし、従つてそれは「AはBなり」といふ形式で表はすことができる。しかるにこゝではその命題が自ら主語の位置をとり、あるは述語として附加され、そして措定されたその判断が實在と一致することを意味してゐる。それ故にこれを「AはBなりは眞なり」の形式によつて代表させることができらるであらう。かしこでは眞はつねに肯定の側に、偽は否定の側にあるに反して、こゝでは眞偽は肯定否定孰れの側にも用ひられてゐる。判断の眞理はそれ自ら矛盾を含まぬのみでなく事物の表象を自らにもつことによつて、即ち思惟が事物と合致することによつて成立する、このことが茲に意味されてゐることの本質的なものでなければならぬ。この様に判断の眞理が、事物にそれと一致して與へられてゐるところの實在的なあるものを措定して述べ、それと一致して成立しないところの實在的要素を拒否して述べることにあるとき、我々はその最も單純な場合としてアリストテレスの次の言葉を擧げてよいであらう。「存在するものを存在しないと言ひ、存在しないものを存在すると言ふことが偽であり、存在するものを存在すると言ひ、存在しないものを存在しないといふことが眞である、従つて存在或は非存在に就て語るところのものは眞或は偽を述べることになるであらう。」^(七)「ひととはこゝに

疑ひもなく真理についてのかの傳統的命題——*veritas est adaequatio rei et intellectus; rei et intellectus convertuntur*——の直截な表現を見出すことができる。^(八) としてもしかく言ふことを好むならば、ひとは真理のこの形態をさきの形式的真理に對立せしめて、質料的真理と呼んでもよいであらう。同じ思想はアリストテレスの體系的時代に屬する卷⑩第十章の中にも殆んど同じ言葉によつて繰返へされてゐる。

「最も卓越した存在^(九) (*τὸ κειρότατον ὄν*) であるところの眞と僞、これは事物についてそれが結合されること或は分離されることによつて生じる、従つて分離されたものを分離されてゐると考へ、結合されたものを結合されてゐると考へるものは眞理を語つてゐるのであり、事物とは反對のことを考へてゐるものは虚僞を云つてゐるのである。」^(一〇)

- (一) *De an.* I^o 6, 430 b 27—28.
- (二) *Cat.* 5, 4 b 8—10, 4 a 36—b 1 參照。
- (三) *Ibid.* 15, 14 b 15—22.
- (四) *Metaph.* E, 4, 1027 b 18—23.
- (五) Brentano; *mannigf. Bedeut.* S. 35 f.
- (六) Brentano; *Wahrheit und Evidenz.* S. 21.

(七) Metaph. I^o 7, 1011 b 26—28. De interpr. 9, 18 a 30—b 5.

(八) Geyser: Erkenntnistheorie d. Aristoteles. S. 54 参照。

(九) 茲に用ひられた *χρηστέα* は Metaph. E^o 1027 b 31 に於ける *ἕτοιμα ἢ τὰυ χρηστὰ* なる言葉と興味ある對立をなしてゐる。この重要な箇所については後に詳論されるであらう。

(一〇) Metaph. θ 10, 1051 b 2—5.

我々はアリストテレスに於ける論理學的眞理の本質を以上のことからして次の二つに求めてもよいであらう。眞理は、つねに、思惟對象の結合と分離とを豫定し、従つて判断を固有の領域とすること、そして眞理の本質は思惟と事物との合致により、嚴密には「判断に於ける事態」と判断の對象に於て成立する事態との合致に存すること。この意味に於て眞としての存在は、既に我々が注意した様に、形而上學ののではなくて、論理學の課題である様に見える。なせならばアリストテレスは卷 E 第四章に於て明確に次の様に述べてゐるからである。「結合と分離とは事物の中にはなく、むしろ思惟の中にある、又この様な存在は固有なる存在とは異つてゐる (*ἕτερον ἢ τῶν κούτων*) からして」といふのは思惟が統一し或は分離するのは本質か、或る性質か、或る分量か、或はなにか他のものであるから、我々は偶有的存在と眞としての存在とを度外に置かねばならぬ。(*ἀπερίεον*) なせならば一方の原因は無限定であり他方のそれは

思惟のバトスであつて、その孰れも存在の残りの類に關し、そして存在の客觀的な性質を明かにしないからである。⁽¹⁾ (kai oiv êkai ên) *oivon obotai tiva pōson tou hōtos* それ故にこれらを度外視しよう、(*apeiōthō*) として我々はそれが存在する限りに於て、存在そのものの原因と原理とを探究せねばならない。⁽²⁾

形而上學がそれ自らによる存在、一般的意味に於ける優越なる存在、即ち範疇の形態による存在をなによりもその對象とするならば——上の章句はそのことを意味してゐる様に見える——眞としての存在は事物の中にはなく思惟の中にあり、思惟のバトスであるからして、それが形而上學の殿堂から放逐されることはまことにその分に適つたことであるに違ひない。さらにイエーガーによつて犀利に指摘された様に、同じ場所で繰返して *apeiōn-apeiōthō* と力強く表現され、又論議を他の場所に譲る場合にアリストテレスに於て常例となつてゐるところの言葉 —— *to hou, tōu* *epōtōn* —— がこゝに見出されないことからして、眞としての存在が偶有的存在とその存在論的價値を全く同一視せられ偶有的存在についても無條件的に言はれた様に、眞としての存在が第一哲學から端的に追放されてゐると論じ得られねばならぬ様に見える。^(三) 従つてアリストテレスの眞理の領域は論理學であり、眞理の本質は事

物と思惟との合致であるといふ眞理の傳統的解釋は、上に論じた限りに於て、全く正當であり、尠くともアリストテレス形而上學の過渡的時代に至るまでを支配した思想である、と言はれねばならぬであらう。アリストテレスの論理學的領域に於ける眞理については尙多くの問題が論じ残されてゐる。^(四)そしてそこに論せらるべきことは概ね彼の論理學的諸問題、殊に判斷の本質並にその諸規定に關する周匝なる研究と解示とを前提してゐる。しかし茲にそれらの興味ある、しかし極めて困難な課題に歩み入ることは我々の意圖ではない。たゞ我々はこれらの問題について我々に新なる道を拓きそしてその領域に於て卓抜なる業績を貽したトレンドレンブルク、ブランドル、及びマイヤーの輝かしい名をこゝに回想するに止めよう。

(一) この場所に對する解釋は區々である。シュネーグラーは、アリストテレスが $\mu\epsilon\tau\alpha$ で $\epsilon\kappa\alpha$ $\delta\epsilon$ ($\parallel \epsilon\tau\epsilon\tau\alpha\varsigma$ $\delta\alpha\upsilon\sigma\iota\kappa\alpha\varsigma$ $\delta\upsilon\tau$ Alex. Schol. 798a6) と呼んだところのものを彼は $\tau\omicron\upsilon\tau\omicron\iota$ $\epsilon\upsilon$ $\tau\omicron\iota\varsigma$ $\mu\epsilon\tau\alpha\upsilon\tau\omicron\upsilon\tau\omicron\iota$ $\delta\upsilon\tau$ と名づけ、そしてそれは $\epsilon\upsilon$ $\delta\alpha\upsilon\sigma\iota\kappa\alpha$ $\delta\upsilon\tau$ と對立をなしてゐる、と解してゐる。Metaph. K8, 1065 a21—24. Schwegler; Metaph. d. Arist. IV. S. 33. Ross; Metaph. Comm. I. p. 366. 參照。

(二) Metaph. E 4, 1027 b 29—1028 a 4.

(三) Jaeger; Studien zur Entstehungsgeschichte d. Metaphysik d. Aristoteles, 1912. S. 23—24.

(四) たゞ我々はアリストテレスに於て、眞偽が結合及び分離する思惟をその支撐者とする思想と並んで、時として眞偽がたゞ綜合に於てのみ或は分離に於てのみ存するといふ言葉に出會ふ。 $\tau\omicron$ ν ρ $\mu\epsilon\tau\alpha\varsigma$ $\epsilon\upsilon$ $\sigma\upsilon\mu\phi\omicron\sigma\epsilon\iota$ $\delta\alpha\iota$ $\chi\alpha\iota$ $\nu\alpha\iota$ $\nu\alpha\iota$ $\tau\omicron$ $\nu\epsilon\upsilon\sigma\theta\alpha$

アリストテレスに於ける眞理概念の發展

は如何に解かるべきであらうか。マイヤーは *subaltern* の中に二つの意味を、即ち現實に合致した仕方、結合された現實の存在を結合して考へるところの客觀的綜合の外に、現實的なるなものにも對應しないところの單なる思惟の主觀的作用、純粹心理的過程に過ぎないところの主觀的綜合、を措定することによつてこのアホリアを解かうとした。凡て判斷に於ては結合さるべき要素の分離が前以て存在しなくてはならない。たとへば「對角線は不可測的である」といふ判斷に於て、「對角線」と「不可測的」とは分離して與へられたものと見られねばならぬ。従つて綜合はつれに分析に結びつき區別された要素は全體に關係づけられ、かくて肯定判斷が成立する。否定判斷に導くところの綜合作用も之に類似した過程をとる。たとへば實在的客觀が現實から離在してゐても、綜合作用がないならば判斷は存在し得ない。従つて判斷はつれに *subaltern* *verqu岸* である。それ故に我々は又判斷に於て前提さるべき要素の分離からして判斷がつれに *balancers* と呼ばれる所以をも見得るであらう。Maier: op. cit. S. 38. Anm. 1. S. 29. 尙 Vahien: Aristotelische Aufsätze, Gesam-mele philologische Schriften I. 1911. S. 162ff. 參照

然し我々はこのアホリアをアリストテレス自身の思想からして、次の様に解き能はぬであらうか。思惟されるものは思惟するものに對してある關係をもつと云はれる。(Metaph. Δ15) 否定判斷に於ても肯定判斷に於けると同様に主語は述語に對して或る關係に立ち、たゞ述語たるべき規定が主語に含まれてゐないことを、兩者の間に綜合の可能が缺如してゐることを、即ちそれらが *σφαιρας* *συζυγείας* なる關係の仕方をとることを意味してゐる。(Metaph. Δ15. 1021a25) ところでアリストテレスにあつて *σφαιρας* は *εως* と對立して語られるのみでなく、又一種の *εως* と考へられたことは明かである。(Metaph. Δ22. Bonitz: Int. Arist. 699 b36 sqq. Zeller: op. cit. S. 216 Anm. 7 參照) *σφαιρας* のことからして否定判斷に於ける主語と述語との關係は *σφαιρας* の意味に於ける *εως* であり、その限りに於て凡ての判斷は *επιδο-φημισχ* に *σφαιρας* と云はれ、同様にして又判斷が *εαίματος* と云はれる、と我々は主張し得ないであらうか。

第二章 形而上學的領域に於ける眞理

我々は再び傳統的眞理命題から出發しよう。眞理が「事物と思惟との合致」として定義されるとき、その合致は何を標識とすべきであらうか。我々はそれを日常的なる個々の知覺に覓むべきであらうか。人間的なる思惟が眞理の規矩となるのであらうか。「存在についてはそれが存在するといふことの、又非存在についてはそれが存在しないといふこと」、人間は尺度であるであらうか。いな、決してさうではない。アリストテレスはプロタゴラスのホモ・メンストラ命題が、のみならず一般に假象或は臆見を直に眞であると主張することによつて事物の眞理を相對化しようとする限りの人々が不可避的に逢着するであらうところの滑稽なる矛盾を指摘してゐる。^(一)かの命題は個々の人に見ゆるところのものが確實であるといふことを意味してゐるに外ならない、さうであるならば同じものが存在するとともに存在しない、同じものが惡であるとともに善でもある、そして他の反對の論も亦妥當する、といふ結果になり終るであらう。なせなら特定のこのものが、ある人には美しく、しかも他の人には醜く見え、各々の人に見ゆるところのものが尺度なのだからである。ホモ・メンストラ命題に對するアリストテレスのこの様な解釋が歴史的に果して正しくある

か否かを我々はこゝに詮議することはできない。我々にとつて重要なことはかうである。たとへば知覺對象が知覺なしには存在しないといふことは明かに不可能であるであらう、なせなら知覺はそれ自らの知覺ではなくて、知覺を超えて或る他のものが存在し、それは必然的に知覺よりも先在しなければならぬからである。(三) 知覺はなによりも或るものの知覺である。(三) 我々が知識或は知覺を事物の尺度であるといふとき、それは我々がそれによつて事物を認識するからに外ならない。しかし事實はむしろそれが度るよりも度られるのである。知識が尺度であり知識し得るものが度られるといふのは唯みせかけにし過ぎない、凡ての知識は知識し得るものであるけれども、その逆は必ずしも眞ではない、ある意味に於て知識は知識し得るものによつて度られるからである。(四) (*metaphys. 1012a19-20* η *metaphys.*) かゝる想定からしてかつて萬物の尺度とされた人間或は人間的思惟は、いまやアリストテレスによつて事象そのものに置きかへられねばならなかつた。眞理はそれを認識する作用としての思惟によつてははなく、却つて認識の對象によつて決定されるのである。或る人が色白くあると思惟することの眞であるのは、その人が色白くあることによつてはあつて決してひとがかく思惟することによつては(五) ない。もしさうでないなら

ば世に色白からざる人の嘆きは存在しなくなるであらう。

しかしこのとき、真理の標識としての対象優位の思想はひとつの著しき撞着に、即ち真理の尺度を存在する事物に索めようとする人々に對して難詰されることをつねとするところの嘸ふべき regressus in infinitum に陥りはしないであらうか。我々は合致命題に於て前提さるべき真理の標識としての事象そのものの十全なる認識を如何にして把握し得るであらうか。それを再び合致命題に歸せしむることによつて我々は無限の逆行を餘儀なくされるのであらうか。このアポリアをカントは極めて剴切に叙述してゐる。「真理は對象と認識との合致に於て成立すると言はれる。従つてこの單なる言葉の説明によると、私の認識が真なりとして妥當するためには客體と一致しなければないのである。しかし乍ら私が客體を私の認識と比較し得るのは、私がそれを認識することによつてのみである。私の認識は従つて自己自身を確言しなければならぬ、しかしそれは真理になほ未だ充分なものではない。なせならば客體は私の外にありそして認識は私の内にあるからして、私はなほ未だ次の様に判断し得るのみだからである、客體の私の認識は客體の私の認識と合致するか。説明上のその様な循環を古人は循環論證と呼んだ。」^(六)

しかし循環論證 (τὸ ἀιρέσθαι τὸ εἶναι ἀληθές) に對してよき反省をもつたアリストテレスが、眞理の定義に於けるかゝる困難を意識しなかつたであらう、と想定することは明かにロゴス的でない。いな、彼はそれを充分自覺し、そしてそれに對して卓れた解決の仕方を示してゐる様に見える。なせならば彼は現實に於ける對象的結合及び分離と、思惟に於ける論理的結合及び分離との合致としての論理學的眞理概念の外に、その根柢をなすところの對象そのものの直觀的認識として、結合されざるもの、端的なるもの、或は事物の形相的本質の眞理が新しき仕方に於て把握されねばならぬことを論明してゐるからである。事物と思惟との合致が眞理の一般的规定であることには疑ひがない。けれども合致すること及び合致せざることをそれ自らの眞理は、單なる一致或は不一致そのものから出てくることはできない。合致はつねにその上に於て甫めて合致が可能となるべき基礎をもたねばならない、しかも合致の始元たるべきこの基礎が再び合致命題によつて保證されることは背理の極みである。思惟が或るものと必ず一致すべきであり、それを離れて眞理が存在し得ないのは、それと一致し或は一致せざるものの中に既に眞理が横つてゐることを示すものでなければならぬ。もし事象そのものに於ける眞理が存在しないならば、合致命題

は自らの生きる道を何處に求め得るであらうか。アリストテレスが思惟と事物との合致としての眞理の根柢に端的存在の直觀的把握としての新しき眞理概念を導入せざるを得なかつたのはあたかも上の理由からであつた。この新しき眞理の光によつて甫めて彼の「眞としての存在」の全構造が隈なく照し出され、かの傳統的眞理概念もそこにその存在論的基礎を拾ひ得るのである。

- (一) *Metaph.* I 5, 6, 8, 3, 1047 a 6—10. K 6. 參照。
- (二) *Ibid.* I 5, 1010 b 30—11 a 2.
- (三) *Ibid.* Δ 15, 1021 a 33—b 2. Plato; *Theaet.* 160 A—C 參照。
- (四) *Ibid.* I 1, 1053 a 31—33, 6, 1057 a 7—12 參照。
- (五) *Ibid.* 8 10, 1051 b 6—9.
- (六) Kant; *Logik*, W W. (Cassirer Ausg.) Bd. VIII S. 364 f.
- (七) 我々はこのためにアリストテレスが分析論に於て與へた循環論證の典型的な敘述を指示すれば充分であらう。(Arist. *pr.* B16, 64 b 28—65 a 9)「あるものはその性質上それ自らによつて、又あるものは他のものによつて知られるから」といふのは原理はそれ自らによつて、しかし原理のあとに来るものは他のものによつて知られるからして)もしひとがそれ自らによつて知られないものをそれ自らによつて論證しようとするとき、まづ最初に論ぜらるべきものをすでに要請してゐるのである。」(αὐτάραι τὰ ἐκείνη)

多くの卓れたアリストテレス學者によつてすらそれがアリストテレスの眞理の

教説の中に占むべき地位と意味とを不當に看過されたところの事象そのものの眞理は、しかし形而上學に於て如何に語られてゐるか。このとき我々にとつて最も手近な思想は、さきに我々が引證したところの卷△第二十九章に於ける事象的虚偽と言表的虚偽との區別を眞理に移して、言表的眞理の根柢に事象的眞理を見ようとするものであらう。しかし我々は言葉の類似によつてその本質を見誤つてはならない。我々はかの場所で事象的虚偽(*des Fictivenen Falschheit*)と云はれたものが本來如何なる意味をもつてゐるかをまづ吟味してみよう。

「虚偽はある意味で偽なる事物として語られる、そしてこれらの中、一は結合されてゐないか或は結合され得ないことによつて言はれる、(あたかも對角線は可測的である、或は君が坐つてゐると言はれる様に。なせならこれらの中或るものは恒に偽であり、他のものほときに偽である、といふのはこれらのものはこの様な意味で存在しないのであるから、)他は存在するところのものであるけれども、その性質上それらがある様にはなく現はれ、或は存在しないものとして現はれるところのものである、(たとへば素描と夢、なせならばそれらは或るものではあるがその表象を我々の中に生じないところのものだからである)。かくて事物はこの様な意味で、一はそれが存

在しないことによつて、他はそれによつて生ずる表象が非存在のそれであることによつて、偽と云はれる。^(一)

こゝに偽なる事物と言はれたものを、我々はブレンターノに従つて判断の對象或はマイヤーによつて判断の内容、質料と解してもよいであらう。^(二)そしてそれは明かに二つの意味に語られてゐる。まづそれは一般に思惟されたものに現實的なものが少しも對應しない場合である。即ちそれが表象された事物の結合或は關聯を表はすとき、判断の内容が實在に於ける關聯に事實的に結合されてゐないとき、或は必然的に分離されてゐることが對應するとき偽が生じる。たとへば「君が坐つてゐる」といふ命題は呼びかけられた者が事實上坐つてゐないとき、又「對角線は可測的なり」といふ判断は對角線が現實に於て必然的に可測的でないとき虚偽である。その二は實的なるものが表象された客體の根柢にあつて而も虚偽の述語が生じる場合である。即ち實在によつて起された表象が原象と合致しないとき、それが存在の十全なる像を生じないにせよ、素描、それが非存在を表示するにせよ、^(三)夢、偽である。一言にして掩へば、*as παράγνα νεύδος* と呼ばれたものは、判断の對象が實在に於けるなものにも對應しない場合及び對象の表象が對象の眞實ならざる像、或は非存在を表はす

とき生じる。従つて「事象としての虚偽はその名にも拘らず、究局に於て思惟に於ける對象の表象と實的なる對象との不一致に過ぎず、真理の標識としての事象そのものの真理とは何らの係りなきものと云はねばならない。ラスクが彼の「判斷論」に於て、アリストテレスの真理概念を没對立的真理、事象的真理、及び判斷的言表の真理の三つに區別し、前者のみを超對立的真理に、後二者を對立的真理に配屬せしめ、そしてマイヤーがたゞ事象的真理と判斷的真理との區別をのみ認め、前者の中に没對立的真理と積極的真理とを包含せしめようとしたことは充分でないと論じたのは、上の理由からして極めて正當であると評すべきであらう。^(四)従つてかの場所に於て論じられてゐるのは論理學的領域に於ける眞偽の概念——言表的(形式的)虚偽概念(*λογος ψευδης*)及び對象的(質料的)虚偽概念(*ως πρὸς τὴν ψευδης*)——であつて形而上學的眞偽の概念ではないと言はなければならぬ。それ故我々は、アリストテレスの形而上學的發展の初期に屬する時代に於ては、端的なる存在の眞理なる思想は未だ見出し得ざるものと論定しなければならぬ。^(五)

(一) Metaph. Δ 29, 1024 b 17--26.

(二) Brentano: *manuzigf. Bedaut.* S. 31 f. *Maier*: *op. cit.* S. 11. *Lask*: *Die Lehre vom Urteil* 1911. S. 42 Anm. 1 參照。

(三) Mater: op. cit. S. 10 f. 参照。

(四) Task: op. cit. S. 145 Anm. 3 参照。

(五) 我々がさきに引用した場所(本文六一頁)に於て、眞としての存在が形而上學の課題でない論ぜられたとき、端的なる存在の眞理について何らの保留がなされなかつたことは、我々のこの主張を裏書きするものであらう。

我々の索めてゐる事象そのものの眞理、端的なる存在の眞理に關する示唆を、我々
 はかの論理學的眞理の本質的典據とされた形而上學卷Ⅴ第四章の中に甫めて見出
 すことができる。この章はその思想内容からして凡そ三つの部分に區別して考へ
 ることが便利であらう。⁽¹⁾ 第一段は、さきに我々が引用した様に眞としての存在、僞と
 ての非存在が事物の結合及び分離に合致した主語と述語との論理的妥當關係に置
 かれてゐる場所である。そして何故に或るものを同時に、或は別々に考へるに至る
 かは別の問題(*ἀλλος λόγος*)、即ち論理學殊に判斷論に於て、又は心理學に於て究明さる
 べき課題であり、こゝでは「別々に」或は「同時に」の言葉の下に單なる繼起(*τὸ ἐφεξῆς*)がで
 はなく、統一をなすこと(*ἐν τῷ ὅλῳ*)、即ち判斷の意味的統一が論せられてゐるので
 ある、と續けられてゐる。あたかもその理由からしてこの章の結論をなすところの
 第三段に於て、偶有的存在と同じく眞的存在が形而上學の課題から放棄さるべく主
 張されたことも、既に我々の明かにしたところである。⁽²⁾ しかるにこの二つの部分を

連結せしむべき第二段に於て、それらの所説を覆し我々の期待に背くに充分なる言説が用意されてゐることは我々を驚かしむるに足るであらう。

「なせならば偽と眞とは、たとへば善が眞であり惡が直に偽である様に、事物の中にあるのではなくて思惟の中にある、しかし端的なるもの及び事物の本質について、

(*ἡμεῖς δὲ τὰ ἐντὸς καὶ τὰ ἔξω*) それらは思惟の中にも存しない。ところでこの意味に於ける存在と非存在とについて探究するべきことを、我々は後に考察しなければならぬ。(五)
[*ἵστανται ἐπινοεῖται*]

我々はこゝに與へられた思想を恐らく次の様に解釋することができらうであらう。眞理が我々の知性の意圖すべき理論的目的である様に、善は我々の情性の志向すべき實踐的目的である。そして兩者の近似性にも拘はらず、認識の眞理は認識された事物の表象が認識する者の中にあるに従つて存在するに反して、善は欲求する者が欲求された對象に順應するに従つてある、といふ區別が見逃されてはならない。

従つて眞は知性の、しかし善は事物の^(六)パトスである。それ故眞がたとへばプラトンの對話篇「ピレポス」に於ての様に、善と類比的に語られない限り、眞は事物の中に存在することはないであらう。しかるに端的なる事物及び事物の本質について、その眞

理は思惟の中ではなく却つて事物そのものの中にある。結合され分離されるところの事物の眞理は思惟の中にのみ、しかし結合されざるもの眞理は事物の中にあると言はれる。それはしかし如何なる意味に於てであるか、その答へは後の場所に於て與へられなくてはならない。もし上のアリストテレスの言葉をこの様に解し得るならば、この場所には明かに二つの相容れざる眞理概念、即ち思惟に於ける眞理とそして事物に於ける眞理とが認容されてゐる。このことは眞理をひたすらに思惟のバトスとして形而上學から追放せねばならぬと宣言してゐる最後の部分の *ἀπερίσπαστα* なる力強き表現と如何にして和解し得るであらうか。イエーガーはこの第二段の思想が他の二つの部分と相互に何らの關聯を有たぬのみならず、互に矛盾してゐること、及びこの場所が内容的に卷⑩第十章と密接に連絡してゐることからして、卷⑤第四章のこの部分が卷⑩のかの場所に於ける章句と同時に、形而上學成立期の最後の時代に於て、現在の場所に填補されたものと推定し、そして「アリストテレスの眞理概念に於けるこの矛盾は決してもともとそこに含まれてゐたものではなくて、卷⑤第四章が瞭然我々にその證據を保有してゐる様に、眞理概念の補充的な擴張によつて甫めて起つて來たのである」と論定してゐる。^(七) 我々は今卷⑤に於け

この場所の成立史的研究に立ち入ることはできない。たゞ我々が、イエーガーの
 解釋に反對して、上の外見的矛盾からして看取しようとするところの思想はかうで
 ある。アリストテレスの初期に於ける眞理の思想を支配したものは、なによりも事
 物に合致した主語と述語との結合及び分離従つて判斷的世界に於ける論理的妥當
 の問題であつた。そして卷E第四章第二段の思想が現在せる關聯に於て最初から
 存在したにせよ、又後に補足されたにせよ、こゝに指示された事物に於ける眞理なる
 思想は、彼の初期的なる眞理形態の本質そのものの要請に從つて啓かれた眞理概念
 への新しき展望乃至その基礎づけとみらるべきものである。こゝにこそアリスト
 テレスの眞理の本質を把握すべき鍵鑰がある。従つて眞理概念に於ける論理的な
 るそして形而上學的なる二つの形態は、決して眞理概念に於ける矛盾ではなく、また
 單なる補充的擴張を俟つてはじめて起つたものでもなくて、却つてそれは眞理概念
 に於ける本質であり、又その必然的擴張を意味しなければならぬ。あたかもアリス
 トテレスの形而上學が初期の超越論的存在學から存在する限りの存在の自己發展
 によつて、存在論的存在學に轉化した様に、眞理概念についてもまた初期のひたすら
 なる論理的形態から、眞理自體の自己發展によつて、その根柢にあるところの存在論

的形態が顯はにされ、そしてそれが論理學的眞理とともに眞理の領域に移し入れられたと想定することは、決して擅なる類比と云はるべきではないであらう。しかしこゝでは端的なる存在の眞理はたゞ豫示されたのみであつて、その論明は明かに後の場所に約束されてゐる。このことは卷 E が形而上學の初期的時代から體系的時代への過渡期に屬してゐたといふ我々の主張の好箇の證左となり得ないであらうか。

- (一) Metaph. E 4, 1027 b 17—25 (par. I) 25—29 (par. II) 29—1028 a 4. (par. III)
- (二) 本文六四頁參照。
- (三) Metaph. E 4, 1027 b 23—25. キーヒンは、この章句を Metaph. Z 12 に (Comm. p. 293) ヲイヤーは、これを De an. I 6 に (Op. cit. S. 24, Ann. 2) 歸せしむる。
- (四) 本文六七頁以下參照。
- (五) Metaph. E 4, 1027 b 25—29. Apodosis (ἴρα—ἵατ. ἐπιτελείω) に對して αὐτὸ τοῦτο, prokasis (τὸ δε δε ἀνάγξις ἐν—ἐν βασιλίᾳ) である。それ故に ὄφρα ἐν ταῖς ἐπιτελείω ἐν τῷ ἐπιτελείω は端的存在についてののみならず、眞偽に關する全般的研究を意味してゐることは注意されなくばならぬ。Jaeger: Entstehungsgesch. S. 23 參照。
- (六) Philib. 37 A—39 E.
- (七) Jaeger. Entstehungsgesch. S. 28.
- (八) 拙稿「アリストテレス形而上學の主題とその構成」(本誌二百七號)九三頁以下參照。

卷E第四章に於ける *Notéon enuocentéon* に對應するものは、既に上に關説された様に、卷D第十章である。アリストテレス形而上學の體系的時代を代表するところの卷Z—Θに於ては、存在の範疇的形態並びに可能現實的形態がそれぞれ周匝にそして精緻に攷究された後に、存在の眞的形態が立ち入つて規定され論説されてゐるのである。それ故にアリストテレスの眞理の思想を全體的にかつその最も成熟せる貌に於て把握しようとするものは、多くの註釋家によつて屢なされた様に卷E第四章をではなく、卷Θのこの場所を本質的な手懸りとせねばならぬであらう。

卷D第十章も亦凡そ三つの部分に、即ち結合或は分離されたものの眞理を述べた部分、結合或は分離されざる存在の眞理を論じた部分、及び結論としての眞理の二重性を掲げた部分に分つことができる。^(一)そして第一段に於て眞偽がなによりも事物と思惟との合致に依據せしめられ、事物に相應する態度をとるものが眞であり、事物に相應しない態度をとるものが僞であると述べられたことは我々の既に論じ得たところである。^(二)これに次いで所謂永久的眞理及び假象的眞理の區別がなされてゐる。

もし或るものがつねに結合されて分離することが不可能であるならば、又他のも

のがつねに分離されて結合することが不可能であるならば、即ち今ある如くあつて他様にあり得ないものは、ときに眞でありときに偽であることはなくて、同じものはつねに眞であるか偽であるか^(三)。従つて不動なるものについては、ひとがその不動であることを假定する限り、時に關して錯誤に陥ることのないのは明かである。恒常的なるものは時間の領域を超えてゐる。たとへば三角形は、それが變化しないと考へられる限り、ときにその内角の和が二直角に等しく、ときに等しくないと考へられることはないであらう、もしさうでないならばそれは三角形の變化を招來するからである。しかし一つの規定が同じ概念の中の或る對象には屬し他の對象には屬しないことはあり得る。たとへば如何なる偶數も決して第一の數でない、と言はれるとき、或るものはさうであり他のものはさうでない、即ち茲では部分的に眞と偽とが許される。しかし數的に一であるところのものについてはこのことは決して生じない。なせならばこゝでは一つの規定が或るものに屬し他のものに屬しないといふことは考へられなくて、對象がつねにかくあることからして、眞或は偽が語られねばならぬからである。換言すればこゝでは眞或は偽が同じ客體の永遠に恒存せる姿として把握されるからである^(四)。しかし分離をも結合をも許すもの、即ち反對のこと

が可能であるものについては同じ意見、同じ言表が偽とも真ともなり、ひとはそれに關してときに眞をときに偽を言ふことができる。(五) 即ち時間的に規定されたものについては時に關して錯誤が存在し能ふ。(六) かゝる想定からしてアリストテレスは結合されたもの及び分離されたものの領域の中に、その對象が永遠にして不變であるか、又生滅し變化するかによつて、時間的眞理と超時間的眞理とを區別した。そしてこゝにつねに分離され又結合されたと云はれるものの眞理、即ち事物の恒常的關係に於ける眞理は、我々をこの場所の第二段に於ける結合されざるものの眞理へ導き入れるであらう。

「ところで結合されざるものについて (*ἑπὶ τῆς τῶν ἀσυνδέτων*) 存在と非存在及び眞と偽とは如何なるものであるか。といふのはそれは結合されてゐるときに存在し、分離されてゐるときには存在しない、といふ様には結合されてゐないからである、たとへば木は白^(七) (*τὸ λευκὸν τὸ ἕν*) 或は對角線は不可測であるといふ様に。眞と偽も亦前の場合と同様には存在しないであらう。或は眞がこれらの場合に同じでないと同様に存在も亦同じではなくて、眞或は偽とは、接觸すること或は言表することが眞であり、(*τὸ μὲν ὀρθῶν καὶ ἠαὐτῶν ἀσυνδέτων*) —— といふのは肯定と言表とは同じではない

から (*ou' yāp taútō kaitiquaous kai phōous*)——知らぬことは接觸しないことである。なせならば事物の本質については、(*pepi to ti ēstai*) 偶然による外は欺かれることはないからである。結合されざる實有についても、(*pepi tās hū' ouubetas oūōtas*) 亦同様である。なせならそれについて欺かれることはできないから。そしてこれら凡ては可能的にはなく現實的にある、さもなければそれらは生成し消滅したであらうから。ところが存在そのものは生成もしなければ消滅もしない、でなければそれは或るものから生成したことになるであらうからである。本質的にそして現實的にあるところのもの、(*ōta hē ēsti ōpēp einai ti kai ēhēpōēan*) これらについては欺かれることはできない、たい知るか知らないかである。しかしそれらについてその本質を、それらがかくかくのものであるか否かを我々は探究するのである。^(九) (*hānāē tò ti ēsti ēpēēnai pepi aútōn, ei touaútā ēstai hē hē*)

アリストテレスの眞理の本質に對して基礎的な意味をもつところのこの場所は、形而上學の全書を通じて最も難解なるものの一つである。こゝには彼の「實有論」に於ける種々の意味深き思想が豫想されてゐるのみならず、所謂アリストテレスの認識論殊に彼のヌースの敎説を顧ることなしには會通し難い多くのものを殘してゐる。

る。しかし我々はこれらの研究を別の機會に譲つて、茲にはたゞ最も疑義の多い若干の言葉について註釋的な解明を與へるに止めて置かう。

(一) *Metaph. θ 10, 1051 a 34—b 17* (par. I) b 17—33 (par. II) 33—1052 a 4 (par. III)

(二) 本文六六頁參照。

(三) *Metaph. θ 10, 1051 b 9—17.*

(四) *Ibid. 1052 a 4—11* の場所は上に論じた永久的眞理の追加的説明とみらるべきものであらう。Matter: op. cit. S. 25

Ann. 3 參照。

(五) *Ibid. 1051 b 13—15.*

(六) *De an. I^o 6, 430 a 31—b 1.* Matter: op. cit. S. 25 Ann. 3 參照。

(七) Ross: *Comm. II p. 276* 參照。

(八) この場所をホーニッツは *obj. et. res. astra*——と讀んでゐる。(Comm. p. 411) それによれば「それらがかくかくのものであるか否かをではなく、それらについてその本質を我々は探究しなければならない」となる。しかし暫く傳統的讀方に従ふ。

(九) *Metaph. θ 10, 1051 b 17—33.*

1' *περὶ τῆ ἀσυνθετα* ⁽¹⁾ *καὶ* *β* 結合され分離されたものに對して「結合されざるもの」

とは何であるか。この意味を正しく把握するために眞理の發生的研究がなされてゐるところのデアニアマ卷 Γ 第六章の叙途を藉りてみよう。そこでは不可分なるもの (*ἀδιαιρέτων*) の三つの區別が擧げられてゐる。一、現實的に量から言つて不可分なる

もの (τὸ κατὰ τὸ πρὸς ἀδιαίρου ἐνεργείᾳ) 二可能的に量から言つて不可分なるもの (τὸ κατὰ τὸ πρὸς ἀδιαίρου δύναμει) 二種⁽¹¹⁾的形相的に不可分なるもの (τὸ τῷ εἶδει ἀδιαίρου)。

量的に不可分なるものとはその連續性によつて云はれる。たとへば我々が長さ
を考へるとき、それは現實的に不可分なるものであるからして、それを不可分的であ
ると考へることを、或はそれを不可分的なる時間に於て考へることを妨げられはし
ないであらう。蓋し時間も長さと同じ仕方で可分的でも不可分的でもあるからで
ある。従つて我々は時間の各々の半分に於て我々の心が何を考へてゐるかを言ふ
ことはできない、なせならそれが分割されてゐないとき、その半分はたゞ可能的に存
在するのみだからである。心が半分の各々を分離して考へるとき、それは同時に時
間をも分離し、そしてそのとき部分はいはゞ分離された長さとなるのである。可能
的に不可分なるもの、即ち點と凡ての分割及びこの様な仕方で不可分なるものは缺
如と同様にして明かにされる。たとへば線は幅も深さもたぬことによつて、たと
へ長さの次元に於て可分的であつても、なほ平面よりも非連續的であり不可分的で
ある。點はこの最後の擴がりをも失つて全く可分的であることを止める。それは
いはゞ *πῦρτι ἀδιαίρου* である。量的には不可分なるものは不可分的な

る時間に於てそして又心の不可分的なる作用によつて考へられる。しかし偶然によつてはそれも可分的である、その意味はそれによつてそしてそれに於て種の統一が考へられるところの思惟及び時間が可分的なる限りに於てではなく、それらが不可分的なる限りに於て可分的なのである。もしさうでないならばその分割は本質的なものとなり、單に外的なものではないであらう。なせならば種的に不可分なるものの中に超越的にあるのでなく時間と長さとをまさに統一せしむべき或る不可分なるものが存在するからである。そしてこのものは時間の中にも長さの中にも凡て連続的なるものの中に同様に見出される。^(三)以上のことから明かである様に現實に於て量的に不可分なるものはたゞ可能的にのみその可分性をもつてゐる。そして可分性が現實的となるとときそれはそれ自身全體を形づくところの現實的な部分に分れる。可能に於て不可分なるものはたゞその極限として考へられたものに外ならない。従つて量的に不可分なるものはその本質上可分的なるものであり、たゞ偶然によつて不可分的であるに過ぎない之に反して種的に不可分なるものの不可分性は、その本質をなし、それが可分的であるのは偶然的であるにしか過ぎない。それ故前者は不可分的なるものの質料を、後者はその形相をなしてゐると云つ

てもよいであらう。そして凡てのものは量によるよりも形相によつて認識され、後者はその本質上前者に先行するからして、種^(四)的なる不可分者は量的なるそれよりもより大なる優越性をもち、我々がさきに結合されざるものとして掲げたものは、まさしく種的に不可分なるものを意味するに外ならないのである。^(五)

しかし種的に不可分なるものに於ける本質的不可分性とは何であるか。これに對するより具象的なる解説を我々はアリストテレスが一について語つたことからして讀取ることができらう。なせならば彼にとつて「一は量的に或は種的に不可分なるもの」に外ならなかつたからである。^(六) 一は種々の意味に語られる。或るものは數によつて、(καθ' ἀριθμῶν) 他のもは種によつて、(καθ' εἶδος) 又類によつて (κατὰ γένος) 或は類比によつて、(καθ' ἀναλογίαν) 一である。數によつてとはその質料が一なるもの、種によつてとはその概念が一なるもの、類によつてとはその範疇の形態が同一なるもの、類比によつてとは或るものに對する他のものの關係である。^(七) それ故に種によつて一なるものはなによりも概念を一にするものでなければならぬ。ところでそれは如何なる意味を擔ふべきであるか。「事物の本質性を述べてゐる概念が他の概念から區別されないとこのものが概念的に一であると云はれる、(ἐν ἑνὶ ἐν

λέγεται ὅταν ὁ λόγος ὁ τὸ τί ἦν εἶναι λέγων ἰδιαιτέρος πρὸς ἄλλου τὸν ἐνηνοῦντα τὸ πᾶνμα) なせな
 らば概念は凡てそれ自身區別し得るものだからである。かくて増加したものと及び
 減少するものですら、その概念が一である限り、一である。一般にその本質性の思惟
 が不可分であり、(ὅπως δὲ οὐ ἡ νόησις ἰδιαιτέρος ἡ νοοῦσα τὸ τί ἦν εἶναι) として時間に於て
 も、場所に於ても、概念に於ても分離されることのできないところのものが卓れて一
 であり、これらの中實有であるところのものが特にさうである、なせならば一般に分
 離をもたぬものが、それをもたぬ限りに於て、一と呼ばれるからである。^(八)これらの言
 葉は、かつてデカルトが精神的直観の對象としての naturae simplices を我々の認識に
 對して、或は我々の認識の順序からして單一なるものと規定したことを、正當に想起
 せしむるであらう。^(九)あたかもその様にアリストテレスにあつても、種的に一なるも
 のは我々の認識上、概念的に、一なるものであり、兩者は相並んで (ἐν ταῖς ἀλλήλοις) 語られ
 ねばならなかつた。^(一〇)ところで上に述べた様に不可分なることによつて一なるもの
 が數的(量的)には個々のものであり、種的には認識に於て不可分なるものであるなら
 ば、不可分なるものは根源的に個別性(τὸ καθ' ἑαυτὸν)と普遍性(τὸ καθόλου)との二つの
 意味に於て語られねばならぬ。^(一一)そして、實有の原因が一なるものが第一に不可分な

るものであるからして、我々は不可分なるものの始元として、*τὴν κατὰ μνηστικῶν οὐρανὸν καὶ νοητικῶν* と呼ばれたところのものの中、なによりも「ウーシア」のそれを指定しなればならないであらう。かくして不可分なるものに於ける普遍性と個別性とは、實有に於ける質料的なるものと形相的なるものとに對應するのである。

11. *Tò pḗn thein kai qianai êntheis* この不可分なるもの、結合されざるものが認識されるのは感性的知覺 (*αἰσθησις*) とヌイス (*νόσις*) とによつてゝある。そして前者は個別性の意味に於ける、後者は普遍性の意味に於ける不可分者を把握する。このことをアリストテレスは次の言葉の中に明示してゐる、個別的なる不可分なる圓について、それが感性的であると理性的であるとを問はず、これらのものについては定義は存しないで、それらは理性的思惟或は感性的知覺によつて知られる。⁽¹¹⁾このことからしてアリストテレスが不可分なるものの把握の仕方を *ἀπειρῶν* なる言葉によつて規定し、接觸すること或は言表することが真であり、知らざることとは接觸しないことである、と云つたことの正當なる意味を、我々は甫めて理解することができらであらう。即ちそれはまづ感性的知覺に於ける *ἐπινοῦναι* なる作用即ち兩端(たとへば知覺するも

のと知覺されるもの(一三)が相連續しその間に第三者の介在を許さぬことを第一にし、
 し理性的直觀に於ける *noēn* なる作用、即ちヌースによる思惟對象の直接なる把握を
 第二に意味してゐたからである。そして結合されざるもの、不可分なるものが感性
 的知覺によつて、或はヌースによつて言表され接觸されるときつねに眞であり、言葉
 の正しき意味に於て偽は存在しない、たゞ不知のみが眞に對して存在するのである。
 不知 (*agnōcein*) も亦二つの仕方で語られるであらう。それはまづ一般的意味に於ける
 錯誤、即ち惡しき對象をもつことであるか、或は知の否定、即ち對象を全く自らの中
 もたぬことであるかである。(一五) そしてこゝに結合されざるものについて不知と云は
 れたものが對象に接觸せざることであり、そして對象なきことであるのは明かであ
 らう。一般に結合されざるものは眞的に思惟されるか、或は全然思惟されないか、
 あらう。

三] *ἀμεταθίηται οὐκ ἔστιν ἄλλ' ἢ κατὰ συμβεβηκός* 不可分なるもの、結合されざるものに
 ついて、我々が上に規定したことからして、ひとは、事物の本質が偶然による外は欺か
 れることはない」と言はれたことの意味をも容易に理解することができるであらう。
 ポーニツツはこれを「不知なる言葉が濫用されて錯誤を意味するものでない限り」事

物の本質について偽は生じないと解してゐる。^(一六) 換言すれば不知なる言葉が、我々が

上に指摘した二つの意味の中第一のもの、即ち誤れる対象をもつことと解釋されぬ限り、従つて不知が對象なきことを意味する限り、事物の本質について偽を生じることはないと云ふのである。この解釋は勿論不可能ではないけれども、しかし極めて皮相的である、と言はれねばならない。我々はさきにこゝに意味された結合されざるものを種によつて不可分なるものと解し、それは本質上不可分なるもの、そしてたゞ偶然によつてのみ可分的なるものである、と規定した。ところでアリストテレスによれば、偽はその言葉の本來の意味に於て、つねに可分的なるもの、結合或は分離を許すものの中にのみ存在する。従つて結合されざるものについて偽が生じるのは、それが偶然によつて可分的なる限りに於てゝなければならぬ。たとへば或るものが人である限り、人としての本質は概念上不可分なるものであり、それが色白くあることによつて、或は教養あることによつて分離されることは、人の本質に對して偶然的規定である。そしてその偶然的規定による分離からして偽が生じる限り、人の本質について偶然によつて偽が生じると云はれることは決して不當ではないであらう。^(一七)

の偽をもつに過ぎない。」と述べたとき、^(二八)上と同じ制限或は規定が想定されてゐた様に思はれる。

四、 *περὶ τῆς ἑνὸς οὐδενὸς οὐδενός* 更に結合されざるものが普遍性と個別性との二つの意味に語られるとき、結合されざる實有と殊更に言はれたところのかの論議多き言葉の意味を論明することも、我々にとつてさまで困難ではない。それは結合されざるものの中に含まれた個別性質料性なる意味を排除し、現實的なる、そして生成と消滅との相を超えたところの純粹に形相的なる存在を意味する。我々の認識の究極に立つものはまさにかゝる不可分にしてしかも普遍的なもの (*τὰ ἀμερῆ καὶ τὰ καθόλου*) でなければならぬ。^(一九)「結合されざる實有」は、凡ゆる可能的なるもの、凡ゆる質料的なるものから純粹なる、そしてあたかもそれ故に我々の認識を溷濁せしむべき如何なるものをもたぬところの、我々に最も熟知せられた實有である。我々はさきに種的に概念的に不可分なるものの本質として事物の本質性の思惟に於ける不可分性を措定した。そのことから明かである様に、我々は「結合されざる實有」として實有なる概念がもつところの種々の意味の中なによりも *τὸ εἶναι* としての實有を擧げなければならぬ。なせならば、アリストテレスの用語法に於て既に一般

に承認せられてゐる様に、實有の中すなはち *ousia* が普遍的でありながら、質料性から脱却しないに反して、*ousia* は質料なき實有 (*ousia aneu hylēs*)、概念的なる實有 (*ousia kata tōn noyōn*) を表示し、従つて形相的なるもの、現實的なるものに屬してゐるからである。⁽¹¹⁰⁾ それ故にシェーグラーが「結合されざる實有」の下に「結合されたもの」或は具體的なるものではなくて、質料なくそして全く現實的にあり、従つて純粹形相であつて、又かゝるものとして如何なる生成消滅をもたないところの實有、嚴密に云ふならば神にのみ適用され、これのみが存在自體と呼ばれ得る様な實有を理解しようとしたのは、⁽¹¹¹⁾ 明かにゆき過ぎてゐると評されねばならない。之に反して、ポニーツがそれを「實體と屬性との區別も、現實と可能との結合をも有たずして、全くの實有であり現實性であるところのもの」を解しようとしたのは、⁽¹¹²⁾ より正しくある様に思はれる。そしてそれが如何なる立場から、又如何なる意味に於てさうであるか、を我は上に明かにした。

この「結合されざる實有」が認識されるのは如何にしてあるか。それはさきにも言はれた様になによりもヌースによつてある。そして、*ousia* の意味に於ける事物の本質がヌースによつて把握されるとき、それはつねに眞である。⁽¹¹³⁾ アリスト

テレスは形相或は概念に關して不可分なる實有を把握するものとしての理性的、思维的、惟(poss)を、個別的なるものを把握するものとしての感性的、知覺(alsothys)からと同じく、結合され分離されたるものの推理的認識としての悟性的、思维的、思惟(duktoua)から嚴密に區別した。事物の本質を直觀的に把握するとき、接觸すること及び言表すること自身が眞であり、(τὸ θεῖον καὶ γινῶν ἀληθές)事物の表象に於ける反省的、抽象的思惟は、肯定或は否定によつて眞理を顯はにする。(ἀληθεύει τὸ καταγινῶν ἢ ἀπογινῶν) しかしこれら三つの認識作用がそれごとく如何なる意味を擔ひ、相互に如何に關聯し、そしてそれらが眞理への通路となるのは如何にしてあるか、これらを明かにすることは我々の別の課題である。(二五)

(一) この言葉は種々の名稱によつて表はされてゐる。 *zavúderu* (Metaph. 0 10) *zavú* (Metaph. E 4) *zavústrow* (De an. I 6) *zavúpés* (Phys. Z I)

(二) De an. I 6, 430 b 7—14. (I) 20—26 (II) 14—20 (III).

(三) この最後の場所は多くの註釋家によつて種々の解釋が與へられてゐる。 Hicks; De an. Comm. ad loc. Maier; op. cit. S. 32 Ann. I.

(四) Metaph. I 5, 1010 a 24.

(五) Baulinger; Aristoteles' Niss-Jahre 1882. S. 45. Ross; Comm. II p. 276 參照。尙不可分なるもの、統一なるものを意味と種々によつて區別しようとする思想は、アリストテレスに於て決して稀なるものではなからず。 Bonitz; Ind. Arist. 8 b

- (六) Metaph. Δ 6, 1016 b 23—24. B. 3. 999 a 1—6 参照。
- (七) Ibid. 1016 b 31—35.
- (八) Ibid. 1016 a 32—b6. アリストテレスはこの章の首めに於て、「一を偶有的なるものと自體的なるものとに區別し、(1015 b16—36)後のものによつて更に、(一)それが連続的であることによつて、(1015 b36—16 a6) (二)その基體が種的に差別をもたぬことによつて、(1016 a17—24) (三)その類が「である」ことによつて、(1016 a24—28) (四)事物の本質性を表はすところの概念が他の概念から不可分であることによつて、(1016 a32—b6)區別してゐる。この二種の無差別なるものと言はれたものが、*εφεξής*に掲げた「数によつて一なるもの」と相覆ふことは、基體が「である」と規定されたことに於て明白なものである。Schwegler: op. cit. III S. 206 参照。
- (九) Descartes: *Regulae ad directionem ingenii*. XII. 参照。
- (一〇) *επιδικάζει*—*επιδικάζει* Sed cum vi partituae distinctivae *ἐπιδικάζει* *ἐπιδικάζει* ea explicatio non videtur conciliari posse. (Comm. p. 237) と論じたのは支持し難い様に見える。尚 *εἶδος* が *λόγος* と同じ意味に用ひられた場所によつては Bonitz: *Ind. Arist.* 219 a51—53 参照。
- (一一) Metaph. I 1, 1052 a29—b1. 尚 M. 8. 1084 b14 に於てはこれらは普遍性(*τὸ κοινόν*)と要素性(*τὸ ἐν μέρους καὶ τὸ ὁμογενές*)なる言葉とを区別して表はされ、前者は概念によつて、後者は時間によつて不可分である、と云はれてゐる。
- (一二) Metaph. Z 10, 1036 a 2—6.
- (一三) Phys. Z 1, 231 a 22. De an. B 11, 423 a 23 参照。
- (一四) Metaph. A 7, 1072 b 20—21 参照。
- (一五) Anul. post. A 12, 77 b 24—26, 16, 79 b 23—24 参照。
- (一六) Bonitz: *Comm.* p. 411. *Ni i forte per absurdum quendam vocabuli ipsam ignorantiam dixeris errorem.*

(一七) ロスはアリストテレスの *ambiguum* を命題に於ける要素或は名辭と解し、それは命題に比すれば「結合されざるもの」であるけれども、絶對に結合されざるものではない、それは類と種差とを含んでゐる、そして名辭が命題の單なる要素と考へられる限り錯誤は存しないけれども、偶然的に、即ちそれが單に命題に於ける要素ではなくて、それ自身類と種との結合である限り誤謬が存し得るもの、と解してゐる。(Comm. II p. 277.)、尙事物の名、綴は可分的であるが、その思惟は不可分であると解するところのテミステイアスの解釋については Hicks: op. cit. p. 599-99. 參照。以上の解釋は極めて示唆的であるけれども、*zeta euzetizis* なる言葉のアリストテレス的な用法が堅く守られてゐない様に思はれる。

(一八) De an. I 3, 428 b 18-19, 427 b 11. De sensu 4, 442 b 8. Metaph. I 3, 1010 b 1-3 參照。

(一九) Anal. post. B 19, 100 b 2.

(二〇) Metaph. Z 7, 1032 b 14. II 3, 1043 b 1-2. その他多數多くの場所。尙これらの言葉の古典的な解釋についてはトントテンマンタの次の卓れた著書が參照されねばならぬ。Trendelenburg: Geschichte der Kategorien, 1846, S. 33ff. Schweigler: op. cit. IV 370ff. 參照。

(二一) Schweigler: op. cit. IV S. 187. マイヤール略。同じ解釋を與へてゐる。Maier: op. cit. S. 7 Anm. 2.

(二二) Bonitz: Comm. p. 410. 尙 Grote; Aristotle 1872, p. 368 參照。

(二三) De an. I 6, 430 b 27-29.

(二四) Edh. Nic. Z. 3, 1139 b 14. Anal. post. A 33, 89 b 7. Schweigler: op. cit. III p. 183 參照。

(二五) 我々はこれらの問題が本稿に続く論文「アリストテレス認識論の諸問題」に於て周匝に論究されるであらうことを期待す。
100

第三章 眞理の二重性

上に於て我々はアリストテレスが如何なる思想的徑路を辿つて端的なる存在の眞理に到達し、又眞理のこの形而上學的形態の下に彼が何を理解したか、を「原典からの叙述」によつて明かにしようと思つた。眞理の領域はアリストテレスにあつて、かつて信せられた様に、判断或は言表をその固有のそして唯一のものとするのではなくて、却つて形而上學の中に究極的なる歸宿を見出さねばならぬこと、そして眞理の本質は思惟と事物との合致の根柢に、——嚴密にアリストテレス的意味に於て——「範疇的直觀」による形而上學的存在自體の端的なる眞理を想定しなければならぬこと、このことが形而上學の成立史的發展を契機として我々の窺ち得た結論であつた。アリストテレスに於けるこの眞理の二重性はさらに、彼が卷^Θ第十章に於ける彼の眞理の敎説を次の様な言葉によつて結んだことによつて、殆んど拒否し難く證し得られるであらう。

「眞の意味に於ける存在及び僞の意味に於ける非存在は一の仕方では結合されたものが結合されるとき眞であり、結合されなるとき僞である。他の仕方では結合されざるものが存在するとすればこの様に存在し、もしこの様に存在しないならば全然存在しないのである。即ち眞理とはこれらを知ることであり、虚僞や欺瞞はなく

て不知が存するのみである。それも盲目の如きものではない、といふのは盲目はある人が思惟能力を全然もつてゐない場合に比せられるからである。⁽¹⁾

眞理についてのこの二重の規定は、アリストテレスにあつて理論的認識の原始的形態をなしてゐたところの彼の感性的知覺論を想起することによつてよりよく理解されるであらう。彼がデ・アニマに於て、それ自らによつて知覺されるものを、——偶有的に知覺されるものは我々の理論的考察の對象とはならないものであるから——或る感官に固有なるものとそれ以上の感官に共通なるものとに區別し、後者に對應するところの共通感覺が嚴密には判斷的知覺として眞と僞とをともに許すに反して、前者に對應するところの固有感覺は我々が健全なそして常態的な知覺をもつ限り決して錯誤に陥ることがなく、又このものが優れた意味に於ける (*supioris*) 知覺であり、この對象が最も基礎的な意味をもつたものである (*altioribus animis*)、と述べたことは周知のことである。⁽²⁾ あたかもその様に、こゝでは理論的認識に於て結合或は分離されるものの判斷的知識は眞と僞とをともに許すけれども、端的なる存在の認識は、たとへば盲目の場合に於ての様に我々が認識能力を缺如する場合を除くならば、つねに眞であつて僞はあり得ない、と主張されてゐるのである。⁽³⁾ ひとはかくて

もなほアリストテレスに於ける眞理の二重性を疑ひ、彼の眞理の本質を傳統的眞理概念に踟躕せしめようとするであらうか。そして端的存在のヌース的把握としての眞理を、再び思惟と事物との合致によつて理解しようとするのであらうか。さらには眞理のかの二重性をその「矛盾」と見、それが眞理の意味の「補充的な擴張」によつて生じたことを主張し續けるであらうか。これらは凡てアリストテレスに於ける眞理の必然的なる發展過程を看過し、その形而上學的なる基礎を没却して、眞理概念の傳統的なる旌旗の下に跪坐しようとする偏頗にして怠惰なる態度にしか過ぎないであらう。アリストテレスの論理學說に對して劃期的な寄與を貽したかのマイヤーにあつてすら、この形而上學的眞理について次の様に言はれてゐるのを見出すとき、我々はこれを如何にして理解し得るのであらうか。「端的存在の概念もそれが直觀の領野から、その個々の規定を擧示するところの論議的思惟の光の中に移し入れられるとき、はじめて人間の認識の全き所有となる。それに附加さるべき最も原始的なる述語、即ち存在ですら判断に於てのみ明白に表示されることができ。概念の眞理が事實上判断となるときにのみ確立され得る所以もそこにある。それ故に單一なる概念の眞理も再び結合されたるものの眞理に歸着するのである。」^(四)マイヤ

1 の解釋によれば、端的存在の眞理も判斷の形をとるときは、はじめてそれに對する我の認識が可能となり、形而上學的眞理も論理學的眞理によつて規定され、従つてかの形而上學的眞理はアリストテレスの眞理說に於て何らの獨自性をも有たない、といふのである。しかしそれがさうでない所以を我々はアリストテレスの「原典」からの叙述によつて明かにした。判斷の形態に於て言表された眞理が我々にとつてよりよく知られるもの (*ἤματα γινώσκουμεν*) であり、結合され分離されるもの、眞理が我々にとつてより先なるもの (*πρότερον πρὸς ἡμᾶς*) であることには疑ひがない。そしてそこからして我々の論理學的研究がこの意味に於ける眞理を出發とすべきことも極めて自然である。^(五)

しかしそのことは眞理の形態がたゞそれのみであり、事物の本質そのものの眞理も亦判斷に於てはじめて主張し得られる理由とはならない。端的なる存在も判斷の形に於て表明することが可能であることは勿論である。けれどもそれは決してそのものの眞理の本質を把握し、その本質をそれ自らによつて語つたものと言ふことができない。なせならば結合されたものの判斷的眞理が *πρότερον πρὸς ἡμᾶς* であるに對して端的なるものの眞理はまさに *ἑπόμενον τῇ γνώσει* を従つて又——さきの言葉に對應せしめるならば—— *ἑπόμενος γνώσκουμεν* を意味すべきだからであ

る。ところでアリストテレスにとつて、本性上より先なるものは、たとへ我々にとつて知ることが困難なものであつても、それ自らに於てはよりよく知られるものである。このものは再び最も熟知されたもの、それ故それによつて他の凡てのものが知られる所以のものである。そして我々はつねに *πρότερον πρὸς ἡμᾶς* から *πρότερον τῶ γούσσει* に進まねばならぬ、といふことは最もアリストテレス的な思想ではないか。我々は何の故を以て真理についてのみはこのアリストテレス的な方法を峻拒し、我々にとつてより先なるものに留まらねばならぬのであらうか。

マイヤーが彼の解釋のひたすらなる典據としたものは、卷Θ第十章第二段に於ける結合されざるものの真理の叙述の最後に與へられたところの「しかしそれらについてその本質を、それらがかくくのものであるか否かを、我々は探究するのである。」
(ἀλλὰ τὸ τί ἐστὶ ἐπιτείναι περὶ αὐτῶν, εἰ τοιαυτὰ ἐστὶν ἡ μὴ) といふ言葉であつた様に見える。⁽¹⁶⁾しかしこの言葉を彼の解釋に役立たしめるならば、この言葉は前後の連絡を失ふのみならず、之に先行する章句と全く矛盾する、なせならばこの場所に於ては事物の本質が判断に於てははなく接觸或は言表することによつて眞であると述べられ、之に續く第三段に於て真理の相異なる二つの存在の仕方が述べられてゐるのだか

らである。ポニーニツツはこの困難を避けるために、古代のアリストテレス註釋家に従つて原典を修正し「それらがかく／＼のものであるか否かをではなく、それらについてその本質を探究するのである」(ἐὰν δὲ τὸ τί ἐστὶν ἕκαστου περὶ αὐτῶν, οὐκ εἰ τοιαυτὴ ἐστὶν αἴτια)と讀むべきことを慫慂してゐる。(七)そしてこのことは内容的に極めて整合的である様に思はれる。しかしたとへ傳統的讀方に従つてみても我々は決してマイヤの解釋をとることができない。なぜならば事物の本質についての次のアリストテレス的思想はこゝでも支持され強調されねばならぬからである。不可分なるものとしての事物の本質性はそれ自らに於ては、或るものによつて他のものを述語するところの定義的規定の仕方をとることはできない、定義は結合され得るものについてのみ可能である。そして本質について我々が教示し得るのは、それが如何なる性質をもつか、たとへば——アリストテレスの用例を藉りるならば——銀が錫の如きものであるか否か、についてである。(八)しかしこの様に本質性が他のものによつて述語されるのは、その偶然的な把握の仕方にか過ぎない、そしてその限りに於て偽が可能なのである。(不可分なるものについての我々の規定を想起せよ。)しかし言葉の本來の意味に於て「端的なるものについては述語的規定による探究或は教示は

あり得ないで、かゝる仕方以外の他の探究方法 (*étepos tpoitos tis énythasas tou toutou*) が存在しなければならぬ^(九)。この他の探究の仕方が接觸或は言表に外ならないのである。以上のことからして、我々の問題となつてゐるところの「しかしそれらについてその本質を、それらがかくかくのものであるか否かを、我々は探究するのである」といふ言葉の正しき理解が可能である様に思はれる。即ちこゝでは事物の本質の眞理が「判断の形に於て言表されるとき甫めて可能であり、従つて端的存在の眞理が再び結合されたるものの眞理に歸着すること」を意味してゐるのではなくて、事物の本質が一般的理解に對してはその偶有的規定であるところの、かくかくの性質をもつか否かの形によつて索められることが可能であることを、そしてそれによつて、論理的眞理と形而上學的眞理との關係を明かにし、かくして結論としての眞理の二重性への門を開いてゐるのである。かく解しないならば、そしてマイヤーの解釋に従ふならば、たとへば我々がさきに引用したところのデアニマのひとつの場所に於て「本質性の意味に於ける事物の本質の思惟はつねに眞であり、そして或るものについて、或るものの述語的規定ではない」⁽¹⁰⁾ (*to toú tí ésti katá to tí hū éinai ánythís, kai ou tí katá tous*) と云はれたことを我々は如何にして理解し得るであらうか⁽¹¹⁾。

- (一) Metaph. θ 10, 1051 b 33--52 a 4.
- (二) αἰσθητικῶν τῶν ἰσθῶν περὶ τῆς ἑνὸς ἰσθῶν ἰσθῶν De an. Bⁱ, 418a11-16, 16, 430b29-31. 彼の眞理性に關する De an. 1³, 428b18-19, 427b11. Metaph. 1⁵, 1010b1-3. αἰσθητικῶν τῶν νοητῶν ἑνὸς ἰσθῶν De an. 1¹, 425a20-30. 彼の眞理性に關する De an. 1³, 428b24-25. De sensu 4, 442b8-10. アリストテレスの感性的知覺論に關するは次の著書を参照せよ。 Beare; Greek theories of elementary cognition 1906. Kamppe; Die Erkenntnistheorie des Aristoteles 1870. Chaignet; Essai sur la psychologie d' Aristote. 1883.
- (三) 誤謬に關して「カキヤトは次の様に述べてゐるか? Meditationes de prima philosophia, Meditatio Quarta, non enim error est pura negatio, sed privatio, sive carentia cuiusdam cognitiois, quae in me quodammodo esse debet;」
- (四) Maier; op. cit. S. 211.
- (五) それ故にトレンデレンブルク及びマイヤーが、アリストテレスの論理學に關する研究を、それ／＼の意味に於ける眞理概念の研究から出發せしめたことは極めて興味あるものと云はねばならぬ。 Trendelenburg; El. log. Arist. Maier; op. cit. 參照。
- (六) Maier op. cit. S. 21 Ann. 4.
- (七) 本文八八頁、註八參照。
- (八) Metaph. 1¹ 3, 1043 b 23--32.
- (九) Ibid. 1¹ 7, 1041 a 32--b 11.
- (一〇) De an. 1¹ 6, 430 b 28--29.
- (一一) この國に於て我々の問題を稍々詳細に取扱つたものに、金子武藏、「アリストテレスに於ける存在」(哲學雜誌、第五二八號)がある。示唆的なる、しかし殆んどマイヤーの解釋によつてゐると思はれるところのこの論文に於て、「かく複合的ならぬもの認識も判斷の形をとるに至つて始めて眞偽の限定を荷ふのであるから、我々は判斷又は判斷意味こそ眞偽

の基體であると云はねばならぬ」(阿、四三頁)と云はれたとき、我々はこれに對して上と同様の非難を加ふべきであるよりも、むしろ氏のマイヤーに對する限りなき忠實さを汲むべきである。

我々はさらに進んで、眞理についての我々のアリストテレス解釋に、より確實な證據として役立つであらうところの極めて重要な、しかし多くの人々によつてその正當な意味を見逃されたところのひとつの場所を指摘しよう。我々が既に注意しておいた様に、卷E第十章に於ける眞理及び虚偽の叙述の首めに於て、眞としての存在は $\tau\omicron$ $\kappa\upsilon\pi\lambda\acute{o}\tau\eta\tau\alpha$ $\delta\upsilon$ 「最もすぐれたる存在」として示されてゐる^(一)。しかるに之に對應するところの卷E第四章に於ては同じ言葉 $\kappa\upsilon\pi\lambda\acute{o}\varsigma$ $\delta\upsilon$ 「すぐれたる存在」が範疇の形態による存在について言はれ、又卷Z第一章その他に於ては同じ存在の形態が $\tau\omicron$ $\epsilon\pi\iota\sigma\tau\eta\sigma$ $\delta\upsilon$, $\tau\omicron$ $\alpha\pi\alpha\lambda\acute{o}\varsigma$ $\delta\upsilon$ 「第一なる存在、端的存在」として表現されてゐる^(二)。このことは眞理の傳統的解釋に對して二重の困難を齎す様に思はれる。まづ眞理概念がひたすらに論理的領域に限局せしめられるとき、眞としての存在が「最もすぐれたる存在」と呼ばれることは如何にして可能であるか。又それと關聯して同じ言葉のこの全く相反した用法は如何に解さるべきであるか、それはたゞ「悪しき辯證家の不用意と非論理性」とに歸着せしめらるべきであるか。これらのアポリアを拓くために、ロスは彼の

校訂にかゝるアリストテレス形而上學の原典に於て、το *κυβιωτάτα* οὐなる言葉を原典編纂者の傍註 (Gloss) として、或はむしる範疇的存在の形態に屬すべきものとして、現在の場所から削除さるべきことを提議してゐる。^(四) しかし我々はかゝる高踏的手段によることなくしてはこの困難を免れることができないのであらうか。イエーガーはこれに對して既に可能なる二つの解決の道を呈示してゐる。一はアリストテレスが形而上學全體の主要なる研究、即ち實有の基礎概念及び可能と現實との究明の後に、眞及び僞について論明を與へたといふ一種の自己承認を、實際にそこに意圖された高揚——*κυβίος* からその最上級たる *κυβιωτάτα* への自覺的なる高揚——を示してゐるものと解すること、他は *κυβιωτάτα* が決して高揚を意味するものではなくて、たゞ言葉の一般的用法に關してゐる、即ちそれは最も普通に用ひられる意味での存在、繫辭の「ある」を意味してゐると解することである。そしてイエーガー自身は彼の立場を第二の道にとつて、卷 E 第四章に於ける *κυβίος* οὐ 及び卷 Z 第一章に於ける *ἑρπύρεως*, *ἀφράδος* οὐ は卷 Θ 第十章の *κυβιωτάτα* οὐ から區別せられ、前二者の場合には論理的形而上學的 *κυβίος* が考へられ存在の内容に關してゐるに反して、後の場合はたゞ繫辭の *εἶναι* の用語法に關してゐる、従つてひとが卷 Θ 第十章のその場所を、こゝに至つて

はじめて *κωιδιάρτα οὐ* が獲られる、といふことに依據せしむるならば、それは語義を誤解することとなり、しかも極めて非アリストテレス的である。こゝでは順次に取扱はれた客體の存在内容の漸次的高揚が論せられてゐるのではないと述べてゐる。(五) 眞としての存在が論理的に結合されたる存在に、そして實在の十全なる模寫を表すところの判断に限られるとき、この眞的存在が *κωιδιάρτα οὐ* と呼ばれ得るためには、イエーガーの解釋に従ふ外に道が残されてゐないのである。しかし *κωιδιάρτα οὐ* なる關聯を上のように全く別個の意味に解釋することは極めて不自然であるのみならず、そのことこそ却つて非アリストテレス的であると言はれねばならない。(六) 之に對する最も自然的な答は上に於て既に用意されてゐる。イエーガーによつて掲げられた二つの解釋の仕方の中第一のものこそ眞を傳へてゐるのである。なせならば卷 E 第四章に於ては、眞としての存在が判断的世界に、繫辭の「ある」に限られ、範疇の形態による存在殊に第一實有に *κωιδιάρτα οὐ* が置かれてゐるにも拘らず、卷 Θ 第十章に於ては、この判断的世界に於ける眞理の根柢にあつてそれを基礎づけるものとしての事物の本質性の眞理が *κωιδιάρτα* として論明されてゐるのだからである。卷 Z、H に於て實有の種々なる意味とその本質が周匝に論究され、卷 Θ 第一—十九章に於て存在

の現實的及び可能的形態が究明された後我々の認識の條件としての現實性に於ける實有が、——可能性はアリストテレスにとつて *dynameos kall' autrhn* 以外のなにもでもなかつた——そして純粹に現實的であるところの (*energeia tou ontikeos*) 單一にして永遠なる實有が新なる真理の對象として *kuraiotata ou* として措定された、と想定することは何故に非アリストテレス的なのであらうか。

たゞ我々は次のことを承認しなくてはならない。不幸にしてアリストテレスは、あたかも彼が形而上學の體系的時代に於て超感性的存在の積極的な説明を與へなかつた様に、この形而上學的領域に於ける真理に對しても、それがもつ意味の重要性に相應しい周匝な規定を與へることをしなかつた。彼はこの真理の形態を、ときには論理的真理と並んで、真理概念のひとつの類型として、又ときには後者を超えて、その根柢にあるところの存在論的基礎としての意味を擔ふものとして規定した様に見える。又真理の形而上學的形態の一般的叙述は形而上學に於ては卷⑩第十章に限られ、そこから彼の真意を汲みとることは著しく困難であり、又デアニマ卷Ⅰ第六章に於ける真理の心理學的分析も彼の真理の敎説に對して説明を與へるよりも、却つて問題を提示するにより多く役立つてゐる様にみえる。^(七) しかしこのことはアリ

ストテレスの眞理の思想に於て、形而上學的眞理が單なる *excursus* として考へらるべき理由とはならない、それは却つて彼が眞理概念を論理學的領域に局限することに満足し得ないで、眞理の存在論的基礎を貫かうとした彼の思索の透徹さを示すものと云ふべきであらう。

アリストテレスに於ける眞理の二重性及び形而上學的眞理の優位の思想は、最近二人の卓れた哲學者によつて、それぞれの體系的立場からして、新しい光の下に齎された。即ちエミール・ルラスクは「判斷論の領域」に於て、傳統的なる對立性の眞理の上にその標識としての超對立性の眞理を措定し、凡ゆる合致説の根柢となつてゐるところの對象の超對立性に對する明かな反省は、合致説の最初の偉大なる典型的建設の中にも、即ちアリストテレスに於て見出され、そして「判斷論の最初の偉大なる企圖が後人の到底達すべからざる高所に立つてゐる」所以をなによりもこゝに索めようとした。^(八) 又マルチン・ハイデッガーは「存在論の領域」に於て、眞理なる言葉のギリシヤ的表現——*aletheia*——が語源的に *α-privatum* によつて構成されたことに特殊の意味を認め、この言葉に直接對應するところの *Entdecktheit* を眞理の原始的性格として措定し、「存在が發見されてあること」「存在の存在性が顯示されてあること」の中に眞理の

存在的、存在論的構造を見究めようとした、そして傳統的眞理概念が如何にこの存在論的眞理に基礎をもつべきかを精細に規定した後に、かゝる眞理の「存在性の理解を學的に完成しそして支配したところのギリシヤ人」としてアリストテレスを擧げてゐる。^(九)我々はこれら慧敏なる人々によつて自らの獨立的なる思索の權威づけに役立たしめようとせられたところのアリストテレスの眞理説の下に、果して何が理解され、又我々の立場からしてそれが如何に評價されるべきやを知らない。たゞたとへ體系的立場からなされたにもせよ、アリストテレスに於て尠くとも傳統的眞理概念とはその存在形態を異にした新しきそして優越なる意味の眞理概念が彼らによつて確認されたことは、我々の眞理に關するアリストテレス解釋に對して何事をも物語らないといふべきであらうか。我々は茲に現代に於ける存在論的哲學へのひとつの課題を發見する。それは勿論アリストテレスによつて解決されはしなかつたけれども、なほ解決への卓れた道を暗示してゐるのである。アリストテレスに於ける眞理の敎説は、それ故に、決して單なる文獻學的、歴史的關心の對象となるのみではない、それは永遠の問題を含み、我々の哲學的思索の實り多き課題として充分攷究され正當に把握されねばならない。いな、その探究の價値は超歴史的であることによ

つて亦眞に歴史的である。なせならばハウフが云つた様に、それがかつて存在したからではなく、それが超歴史的意味をもつ故にのみ眞に歴史的となるからである。^(一〇)

- (一) Metaph. θ 10, 1051 b1. 本文六七頁註九參照。
- (二) Ibid E 4, 1027 b31. 本文六七頁參照。
- (三) Ibid Z 1, 1028 a30—31. 其他多くの場所。
- (四) Ross; Comm. II p. 274 sq.
- (五) Jaeger; Entstehungsgesch. S. 51 f.
- (六) アリストテレスは同じ意味で固有感覚の對象を *κατὰς* と呼んでゐる。De an. B6, 418 a24. 本文一〇二頁參照。
- (七) テ・フニエールの章と形而上學卷E第四章との年代學の見解については Jaeger; Entstehungsgesch. S. 27f. 參照。
- (八) Lask; op. cit. S. 145 f.
- (九) Heidegger; op. cit. S. 225. 最近ハイテッカーの影響の下に、アリストテレスの眞理概念を「發見性」として讀み直さうとしたものに Schilling-Vollmay; Aristoteles Gedanken der Philosophie 1928 がある。しかし遺憾ながらこの書に於てはその解釋が主張されただけで、かゝる解釋がアリストテレスの形而上學的思想と如何に調和するかは少しも示されてゐないのみならずかゝる解釋がアリストテレス學に於て果して可能であるか、については多くの疑ひが残されてゐる。
- (一〇) Bauch; Das Substanzproblem in der griechischen Philosophie. 1910.

結論 アリストテレスに於ける眞理概念の發展

我々は今一度アリストテレスに於ける眞理概念の發展的契機を概観し、それとプ

ラトンの關聯を示唆することによつて、我々の究明を閉ぢよう。

プラトンは對話篇「ソピステス」に於て、明かにアリストテレスを想起させる仕方、「存在するものをありの儘に語るものが眞であり、存在と異つて語ることが偽である」と定義してゐる。^(一) プラトンにとつても命題 (Dogma) の眞理は存在するものを存在し、存在せざるものを存在せずと語ることに外ならなかつた。そしてプラトンの後期的思想、殊に彼の辯證法的對話篇から出發して、プラトンの形而上學の中に存在學と論理學とを明別することを、自らの最初の課題としたところのアリストテレスが、彼の初期的思想に於て、かの「ソピステス」篇に於ての様に、眞理を判斷的世界に存在の妥當なる言表に、そして事物と思惟との合致に求めたことは極めて自然的であると云はねばならない。そしてこのとき、彼がプラトンの初期的思想を支配したところの、我々の認識を超えた天上的なる眞理の形態を見棄てて、ひたすらに我々の認識を統治するところの地上的なる眞理をまづ把握し、あたかもそれ故に眞理を論理學的領域に限局したことも、我々にとつて充分理解し得ることである。(卷△第七章) 然し彼が好んで語つた様に、事象そのものは彼をして探究の歩をそこに止まらしむることを許さなかつた。彼の形而上學的思想の發展とともに、眞理は自らの安住すべ

き根據をもとめ、論理の世界を超えて、更に形而上學的なるものを翹望し、形而上學的
 發展のかの過渡的時代に於ては、形而上學的眞理が——たゞ試論的な形でではある
 けれども——要請されねばならなかつた。(卷Ⅴ第四章)かくて後期の體系的時代
 に於て甫めて論理學的眞理の根柢に端的なる存在そのものの眞理が提示され、この
 ものが形而上學的固有なる課題 *καὶ πάλιν ἡ αὐτὴ* として示されたのである。(卷Ⅹ第十章)
 ひととはこゝに此岸的なる存在を母胎として生れたイデア的なる眞理の復活をみる
 ことができるであらう。アリストテレスをプラトンの惡しき排撃者とのみ信じる
 素朴なる人々は、アリストテレスの眞理學說の中にかゝるプラトンの眞なるものを窺
 ひ得ようとする我々の解釋を單なるアナクロニズムにしか過ぎないと嘲笑するか
 も知れない。又アリストテレス形而上學的核心をかのプラトンのイデア批判にも
 とめようとする人々は、我々の所謂形而上學的眞理を却つて最も非形而上學的なる
 ものとして却けるかも知れない。しかしかの親愛なる人がイデアを持ち込んだと
 き、アリストテレスの峻拒したのは、我々の認識への通路を沮むところのイデアの超
 越性であつて、決してイデア的なる世界そのものではなかつた。彼の形而上學は、我
 々が別の機會に於て證示し得たであらう様に、その凡ゆる時代を通じてつねに、感性

的なるものから超感性的なるものへの發展を含むところの存在する限りの存在の學であつた。そしてそこに於て彼の關心が、彼の哲學的思索の深化によつて、超感性的世界から感性的世界をこめての存在一般に移行したことは、彼が眞理の問題についてひたすらなる論理的形態から形而上學的なるものをも含むところの眞理一般の形態に發展したとと嚴密に一致してゐるのである。この意味に於て、そしてたゞその限りに於て、後期の形而上學的眞理が「アリストテレス形而上學の中に救ひ上げられたところのプラトンの直觀乃至イデアの最後の殘基である」と云はれたこと(三)も正當に理解され得るであらう。あたかもその理由からして、アリストテレスに於ける眞理の二重性は決して矛盾關係にあるのではなくして却つて眞理の樓屋の本質的構造關聯をなしてゐるのである。

しかし眞理の二重性の思想はギリシヤ哲學に於てアリストテレスを以て嚆矢とすることはできない。たとへばトレンデレンブルクも指摘した様に、プラトンにとつても眞理は二重に意味づけられてゐた。即ち眞理は彼にあつて、我々が既に「ソピステス」篇に於てみた様に、思惟と事物との合致であるのみならず、「ピレポス」篇の或る場所が示してゐる様に、それは我々の思惟に依繫をもたぬところの對象そのものに

於ける眞理、對象の純粹性に依存するところの眞理であつた。(五) としてプラトンが彼の「ソクラテスの對話篇」に於て主として眞理自體としてのイデアを、しかし後期に屬する「辯證法的對話篇」に於て論理的なるそしてイデア的なる二重の眞理を構想し得たことは、アリストテレスが論理的眞理から出發しその後期的發展に至つて眞理の二重性に想到したと極めて意味深き對立をなしてゐるのである。そしてこゝにもひとは人間の思想の歴史を貫く二つの道——上からの(ἀπὸ τοῦ ὑψηλοῦ)そして下からの(εἰς τὰς ἀρχάς)道——を觀取し得るであらう。(六) ひとはさらに又ギリシヤ哲學の巨匠によつて創造されたこの輝かしい眞理の二重性の思想の中に、それがもつところのギリシヤ的な形態にも拘らず、中世を通じて人々の思索を執拗に支配し續けたところのかの duplex veritas 思想への萌芽を感じ得ないであらうか。(七)

(一) Soph. 263 B. 240B—E. καὶ ἄλλος ὁ γὰρ ψεύδης ὁ γὰρ κατὰ τὰ νόμισμα/στρατὰ τὰ ἴνα κήκων καὶ εἴνα καὶ τὰ μὴ ἴνα εἴνα. Cratyl. 385B. 431B 參照。

(二) 拙稿「アリストテレス形而上學の主題とその構成」(本誌二〇七號)七六頁參照。

(三) Jaeger; Aristoteles. S. 212.

(四) Trendelenburg; De Platonis Philebi consilio, 1837. p. 14. Veritas est duplex, vel cognitio quae cum rei natura consentit, vel natura quae ipsius rei notionibus et notioni illa respondet, ut id sit quod esse debet. 尚 Duty; The Philebus of

Plato, 1897. Appendix F. 參照。

(五) 「ソピステス」篇に於ける上掲引用箇所を、「ピレホス」篇三六C—五三Bと比較することはこのことを理解するために最も手近であらう。しかし我々はプラトンに於ける眞理思想の「原典からの敘述」を他の機会に譲らねばならぬ。

(六) Resp. 511 B. Edh. Nic. A 4. 1095 a 30—b 1 參照。

(七) Wygwald; Die Lehre von der zweifachen Wahrheit, 1868 參照。